大学共同利用機関法人
人間文化研究機構

令和6(2024)年度

国立歴史民俗博物館 要覧

NATIONAL MUSEUM OF JAPANESE HISTORY

目 次

館長挨拶
歴博のめざすもの …… 1
大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 …… 2
概要 …… 4
沿革 …… 6
施設概要 …… 7
組織図 …… 8
運営会議委員等 …… 9
研究部／客員教員／特別客員教員／非常勤研究員 …… 10
メタ資料学研究センター …… 12
研究推進センター …… 13
共同研究 …… 14
博物館資源センター …… 18
総合展示／プロローグ …… 19
第１展示室 …… 20
第２展示室 …… 21
第３展示室 …… 22
第４展示室 …… 23
第５展示室 …… 24
第６展示室 …… 25
くらしの植物苑 …… 26
企画展示室 …… 27
碑の小径／入館者数 …… 28
資料調査研究プロジェクト／資料の利用 …… 29
資料・図書・データベース …… 30
広報連携センター／広報・普及 …… 31
社会連携 …… 32
大学・大学院への貢献・利用／研究者受入・大学院教育協力等 …… 33
総合研究大学院大学 先端学術院先端学術専攻 日本歴史研究コース …… 34
国際学術研究交流 …… 36
国内学術研究交流 …… 38
予算／外部資金等 …… 39
出版活動 …… 40
利用案内／交通案内 …… 41

表紙写真解説

楓樹幔幕大太鼓模様振袖
野村正治郎衣装コレクションより

今日の服飾史・染織史研究の基礎をつくった一人に，野村正治郎（1879～1943年）がいます。古美術商であった正治郎は，染織品および江戸時代の女性風俗に多大な関心を寄せて精力的に蒐集に努め，近世の染織品・服飾品の一大コレクションを築き上げました。その大半は歴博の所蔵となっており，質量ともに有数の規模を誇るコレクションとして国内外に知られています。表紙の振袖は，当コレクションのうちの一点です。

館長挨拶

国立歴史民俗博物館（略称「歴博」）は，大学共同利用機関法人人間文化研究機構を構成する６つの研究機関の１つです。現代的視点・世界史的視野のもとに，日本の歴史と文化に関する研究を進めています。

文献史学・考古学・民俗学および自然科学を含む関連諸学の協業によって，「学際的，先進的，総合的な人文学研究」を，大学をはじめとする国内外の研究者とともに推進することを特徴としています。

同時に1983年に開館した当初から，こうした研究の成果を，総合展示および企画展示というかたちで可視化することで研究そのものの高度化を図ってきました。そして広く社会に公開・発信することを目的として，博物館という形態をとっています。2019年３月には，「第２の開館」と位置づけて，開館以来36年ぶりに総合展示第１室「先史・古代」をリニューアルし，一般公開いたしました。

では歴博がおこなっている人文学研究は，なぜ必要なのでしょうか。人間社会を維持するためには，知識と知恵が必要です。その知識と知恵は人間の長い歴史のなかで蓄えられ作り上げられてきました。

いわば人文学研究は，「過去を知ることで，現在を考えて今を生き，未来を創造する」ことに貢献することだと思います。

私たちはその知識と考える力をよりよいものに高めていく必要があります。そのためには人類の歴史を多様な視点から見つめながら，歴史のなかで培われた知識と知恵がどのように生まれてきたのか，また知識と知恵が社会と人にどのような影響を与えてきたのか，その歴史を明らかにする必要があります。

世界は激動の時代です。国家のあり方や国家間の関係性の枠組みが激しく揺れ動いているだけではありません。技術革新が誰も想像もしなかった方向へと急速に変化し，環境破壊や経済格差が進み，さらに新型コロナウイルス感染や，世界各地で頻発する紛争，軍事衝突は，世界システムそのものの矛盾を露呈させその影響は甚大です。一体この先，私たちがどうなるのか，どこへ向かうのか，どうしたらいいのか誰にもわからず，その不透明感と不安感が世界を覆っているようにみえます。

私たち歴博は，今一度，人類の歴史活動のなかで，自分たちの立ち位置に確かな見解をもつことが責務だと考えています。

そして私たち自身が「人類の歴史を広い視野でみる力」「過去や異なる世界を想像する力」「異質な世界観や価値観をもつ他者に対する共感力」を養うとともに，「過去，現在，未来を考える総合知」をもった次世代の人を，皆様とともに育てていく必要があると考えています。

今後とも歴博に対する皆様のご理解とご協力を心よりお願い申し上げます。

大学共同利用機関法人　人間文化研究機構
国立歴史民俗博物館長　西谷　大

歴博のめざすもの －博物館という形態の大学共同利用機関として－

日本の歴史と文化の研究
－未来を切り拓く歴史的展望の獲得と，歴史認識を異にする人々の相互理解を実現する－

博物館型研究統合の推進
－博物館という形態を活かした新しい研究スタイル－

共同利用性の充実
－研究資源・研究過程・研究成果を国内外の研究者と共有する－

新しい研究者の養成
－博物館型研究統合を担う人材を養成する－

日本の歴史と文化への理解の促進
－多様な歴史像と柔軟な歴史認識を国内外のすべての人々に提供する－

国立歴史民俗博物館（略称「歴博」）は，日本の歴史と文化に関する研究を組織的かつ持続的に推進するために設置された大学共同利用機関です。その使命は，人類の歴史的営為が複雑に絡み合った現代社会において，未来を切り拓く歴史的展望の獲得と，歴史認識を異にする人々の相互理解の実現に寄与することにあります。

歴博は，歴史資料・情報の収集，整理，保存，調査研究そして提供という一連の機能を有することを最大の特色としています。これらの機能を有機的に連携させた博物館型研究統合によって，有形無形の多様な資料に基づき，文献史学・考古学・民俗学および自然科学を含む関連諸学の学際的協働を通じて，現代的視点と世界史的視野のもとに，日本の歴史と文化に関する基盤的並びに先進的研究を推進します。大学共同利用機関として，そのすべての機能を国内外の研究者と共有するとともに，次代を担う研究者を育成し，それらの活動を通じて広く国内外の人々に日本の歴史と文化への理解を促進します。

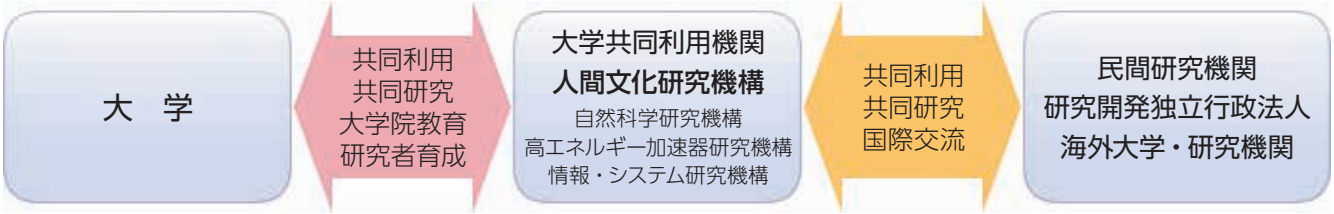
博物館型研究統合

大学共同利用機関法人　人間文化研究機構

https://www.nihu.jp/

大学共同利用機関とは

各々の研究分野における我が国の中核的研究拠点（COE）として，個別の大学では維持が困難な大規模な施設設備や膨大な資料・情報等を国内外の大学や研究機関等の研究者に提供し，それを通じて効果的な共同研究を実施する研究機関です。



大学共同利用機関法人　人間文化研究機構

人間文化研究機構（人文機構／NIHU）は，人間文化研究を推進する６つの大学共同利用機関を支え，さらなる研究の発展を図る法人として，2004年に設置されました。現在の構成機関は，以下の６機関です。

- 国立歴史民俗博物館（歴博）
- 国文学研究資料館（国文研）
- 国立国語研究所（国語研）
- 国際日本文化研究センター（日文研）
- 総合地球環境学研究所（地球研）
- 国立民族学博物館（民博）

６つの機関は，それぞれの研究分野における国際的な中核研究拠点として，国内外の大学等研究機関，研究者と連携して，基盤的研究及び学際的研究を推進しています。人文機構は，これら６つの機関同士，あるいは機構内の機関と機構外の大学等とをつなぎ，研究資源の構築，実証的研究，理論的研究を進めるとともに，自然科学との連携を含む新しい研究領域の創成を目指して，人間文化に関する総合的な学術研究とその発信に取り組んでいます。

人文機構のミッションとビジョン

■ミッション

人文機構は，人間文化研究に関する唯一の大学共同利用機関法人として，人間とその文化を総合的に探究し，その探求を通じて，真の豊かさを問い，自然と人間の調和を図り，人類の存続と共生に貢献することをミッションとしています。

■ビジョン

ミッションの実現に向けて，法人第４期には，人間文化の多様性や社会の動態を踏まえて，現代社会の様々な課題を追究し，その解決を志向するとともに，人と自然が調和し，科学技術と人間性とが共存する未来社会の実現のための指針となるべき新しい価値観や人文知を提示することを目標としています。その達成のために，社会に開かれた新たな知の形成を目指して，2022年４月に人間文化研究創発センターを設置しました。センターでは，国内外の様々な人々との共創による開かれた人間文化研究という理念のもと，デジタル技術を用いた研究基盤を構築するとともに，その基盤を活用した共同研究を推進し，さらに社会の様々な人々との交流と協働の場としての「知のフォーラム」の形成，国際的なネットワーク形成に取り組んでいます。

開かれた人間文化研究をめざす「人間文化研究創発センター」

人間文化研究創発センターでは，人文機構のミッションとビジョンに基づき,「基幹研究プロジェクト」と「共創先導プロジェクト」を推進しています。

■基幹研究プロジェクト

機構の根幹をなす人間文化に関する基盤的・学際的研究として，３類型11の研究プロジェクトを実施し，学術ネットワークの拡大や新分野創出等によって，大学共同利用機関としての使命の実現を図っています。

【機関拠点型】 人文機構の６機関が主体となって実施するプロジェクト	日本歴史文化知の構築と歴史文化オープンサイエンス研究（歴博）
	データ駆動による課題解決型人文学の創成（国文研）
	開かれた言語資源による日本語の実証的・応用的研究（国語研）
	「国際日本研究」コンソーシアムのグローバルな新展開－「国際日本研究」の先導と開拓－（日文研）
	自然・文化複合による現代文明の再構築と地球環境問題の解決へ向けた実践（地球研）
	フォーラム型人類文化アーカイブズの構築にもとづく持続発展型人文学研究の推進（民博）
【広領域連携型】 機構内の複数の機関が連携して実施するプロジェクト	横断的・融合的地域文化研究の領域展開：新たな社会の創発を目指して（主導機関：歴博・民博）
	人新世に至る，モノを通した自然と人間の相互作用に関する研究（主導機関：地球研）
	異分野融合による総合書物学の拡張的研究（主導機関：国文研）
【ネットワーク型】 他の大学や研究機関と連携して実施するプロジェクト	グローバル地域研究推進事業（主導機関：民博）
	歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業（主導機関：歴博）

■共創先導プロジェクト

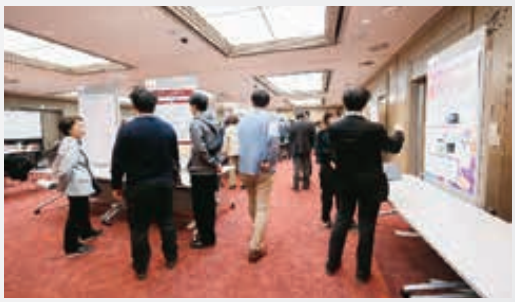
各機関及び国内外の大学等研究機関が連携して，研究資源や研究成果の共有化及び地域との共創・協働等を通して社会に貢献するプロジェクトです。これらを通して,「社会共創」「デジタル化」「国際共創」という３つの研究展開を図ります。

３つの研究展開	共創促進研究	共創促進事業
	機構内外の多様な組織や人々との共創による共同研究を推進し，３つの研究展開を促進します。	３つの研究展開を加速化させるための事業を実施し，機構内機関及び機構外大学等研究機関の研究の高度化・創発を図ります。
社会共創	コミュニケーション共生科学の創成	知の循環促進事業
デジタル化	学術知デジタルライブラリの構築	デジタル・ヒューマニティーズ（DH）促進事業
国際共創	日本関連在外資料調査研究	国際連携促進事業

【TOPICS】デジタル・ヒューマニティーズ（DH）促進事業

人文機構では，2022年度から６年間の重要課題としてデジタル・ヒューマニティーズ（DH）の推進を掲げています。2023年度には「DH推進室」を設置し，さまざまな取組みを推進しています。

教育動画「DH講座」を機構YouTubeチャンネルで公開


若手研究者のポスター発表・交流を行った「DH若手の会」

概　要

第４期中期目標・中期計画期間における取組

2022年度から開始された第４期中期目標・中期計画期間において，歴博では，学際的な共同研究や研究分野の異分野連携・融合をはじめとする新たな取組を進めています。

研　究

■共同研究

歴博では，大学共同利用機関として，国内外の研究者とともに，歴史学，考古学，民俗学および分析科学を含む関連諸学と協業し，実証的，学際的，そして国際的な日本の歴史と文化に関する共同研究を推進しています。

共同研究は，「人間文化研究機構基幹研究プロジェクト・共創先導プロジェクト」「基幹研究」「基盤研究」「開発型共同研究」および「共同利用型共同研究」の５つの柱から成り立っており，その概要は次の通りです。

人間文化の新たな価値体系の創出に向けて，国内外の研究機関や地域社会等と組織的に連携し，また，人間文化研究機構の研究展開を一層強化するために，人間文化研究機構が設定した『人間文化研究機構基幹研究プロジェクト・共創先導プロジェクト（2024年度：６件）』，先端的な歴史研究の開拓を目指す資料論的かつ方法論的な挑戦的研究や，日本の歴史と文化を広く通史的な視点に立って研究する『基幹研究（2024年度：５件）』，考古・歴史・民俗の資料に基づく実証的で学際的な研究である『基盤研究(2024年度：７件)』，若手研究者を対象として新規課題の発掘と人材育成に取り組む『開発型共同研究(2024年度：２件)』，また，外部の若手研究者を対象として館蔵資料および分析機器・設備を利用した『共同利用型共同研究（2024年度：６件）』です。

■展示プロジェクト

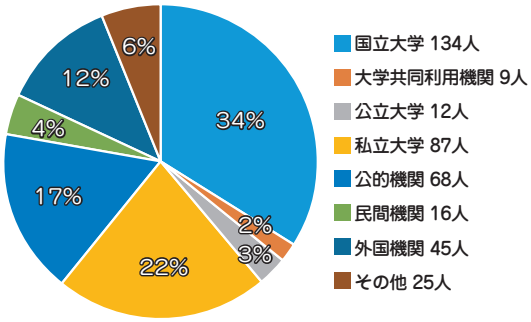
歴博では，研究の成果を活かし，その成果を研究者や社会に広く還元するため，総合展示・企画展示・特集展示等の展示構築を行うための「展示プロジェクト(2024年度：12件)」に積極的に取り組んでいます。

■資料調査研究プロジェクト

歴博が蓄積する所蔵資料を研究に広く有効活用できるように，基礎データを調査・整理し，多様な形態で公開するための「資料調査研究プロジェクト（2024年度：２件）」を計画的に進めています。

■研究交流

国内外の大学等の研究機関と学術交流を図るため，2024年５月現在，55件の国際・国内交流協定を締結しています。



歴博における研究等プロジェクト参画研究者数
（2023年度：のべ396人）

※機関拠点型基幹研究プロジェクト・広領域連携型基幹研究プロジェクト・ネットワーク型基幹研究プロジェクト・共創先導プロジェクトの共同研究者数を含む。

共同利用

■資料収集とデータベースの公開

歴博では，実物資料・複製資料・映像音響資料およびこれに関連する資料を計画的・継続的に収集しており，2024年５月現在，277,605点（うち国宝５点，重要文化財87点，重要美術品27点），図書を372,378冊所蔵しています。

また，所蔵資料を広く公開し，研究利用に資することを目的とした館蔵資料データベース，諸分野の文献目録や共同研究の成果を収録したデータベースおよび記録類全文のデータベースを提供しています（2024年５月現在71本）。

洛中洛外図屏風（歴博甲本）部分（重文）

人間文化研究機構基幹研究プロジェクト・共創先導プロジェクトにおける取組

現代的な諸課題の解明と解決に資することを目的に第４期中期目標・中期計画期間に人間文化研究機構が推進する各「基幹研究プロジェクト・共創先導プロジェクト」に積極的に参画し，国内外の大学等研究機関と連携しながら研究を推進します。

機関拠点型基幹研究プロジェクト

○「日本歴史文化知の構築と歴史文化オープンサイエンス研究」

広領域連携型基幹研究プロジェクト

○「横断的・融合的地域文化研究の領域展開：新たな社会の創発を目指して」（主導機関）

▶「フィールドサイエンスの再統合と地域文化の創発」

○「人新世に至る，モノを通した自然と人間の相互作用に関する研究」

▶「同位体による年代・古気候・交流史研究」

○「異分野融合による総合書物学の拡張的研究」

▶「延喜式のデジタル技術による汎用化」

東日本大震災における被災歴史文化資料の救済活動（宮城県石巻市）

ネットワーク型基幹研究プロジェクト

○「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」（主導機関）

共創先導プロジェクト（共創促進研究）

○「日本関連在外資料調査研究」

▶「外交と日本コレクション−19世紀在外日本資料の世界史的文脈による研究と現地およびオンライン空間における活用」

共創先導プロジェクト（共創促進事業）

○「開かれた人間文化研究を目指した社会共創コミュニケーションの構築」

▶「歴史展示の実践に基づく展示空間・情報空間の高度化」

社会連携・情報発信

歴博では，研究成果を，展示だけでなくさまざまな社会連携・情報発信の一環として社会に還元しています。

■フォーラム・講演会等の開催

研究成果を広く一般に公開するため，一般の方々を対象に「歴博フォーラム」や，「歴博講演会」等を開催しています。

■専門職員研修事業などの実施

全国の歴史民俗系博物館や資料館の専門職員の活動に資するため，毎年，文化庁と共催で「歴史民俗資料館等専門職員研修会」を開催しています。

■歴史民俗系博物館の連絡体制の構築

東日本大震災を機に設立した「全国歴史民俗系博物館協議会」（2024年３月末現在：加盟数821館）の幹事館・事務局館として，歴史民俗系博物館の連携を促進するための活動を行っています。

■情報発信

歴史と文化への好奇心をひらく『REKIHAKU』の刊行，れきはくホームページ（https://www.rekihaku.ac.jp）の充実および大学共同利用機関シンポジウムへの出展等を通して，歴博の取組や研究成果等について広く情報発信を行っています。

大学連携・大学院等教育

歴博は，国内外の多くの大学と連携協定を結んでいます。いかにして研究成果を大学等へ還元するか，また大学共同利用機関として人材育成にどのような貢献ができるのか，その仕組み作りと実践に取り組んでいます。

総合研究大学院大学先端学術院先端学術専攻日本歴史研究コースにおいては，個別授業・基礎演習・集中講義の３つの形態の授業により，博士論文の作成指導と研究者としての能力の育成を図っています。

また，従来より特別共同利用研究員制度を設けて大学院生を受け入れ，必要な指導を行っているほか，連携大学院制度や「国立歴史民俗博物館未来世代育成プログラム」により，実施に必要な協定を締結した大学院・大学に向けて，歴博の研究成果を活用した集中講義を提供しています。

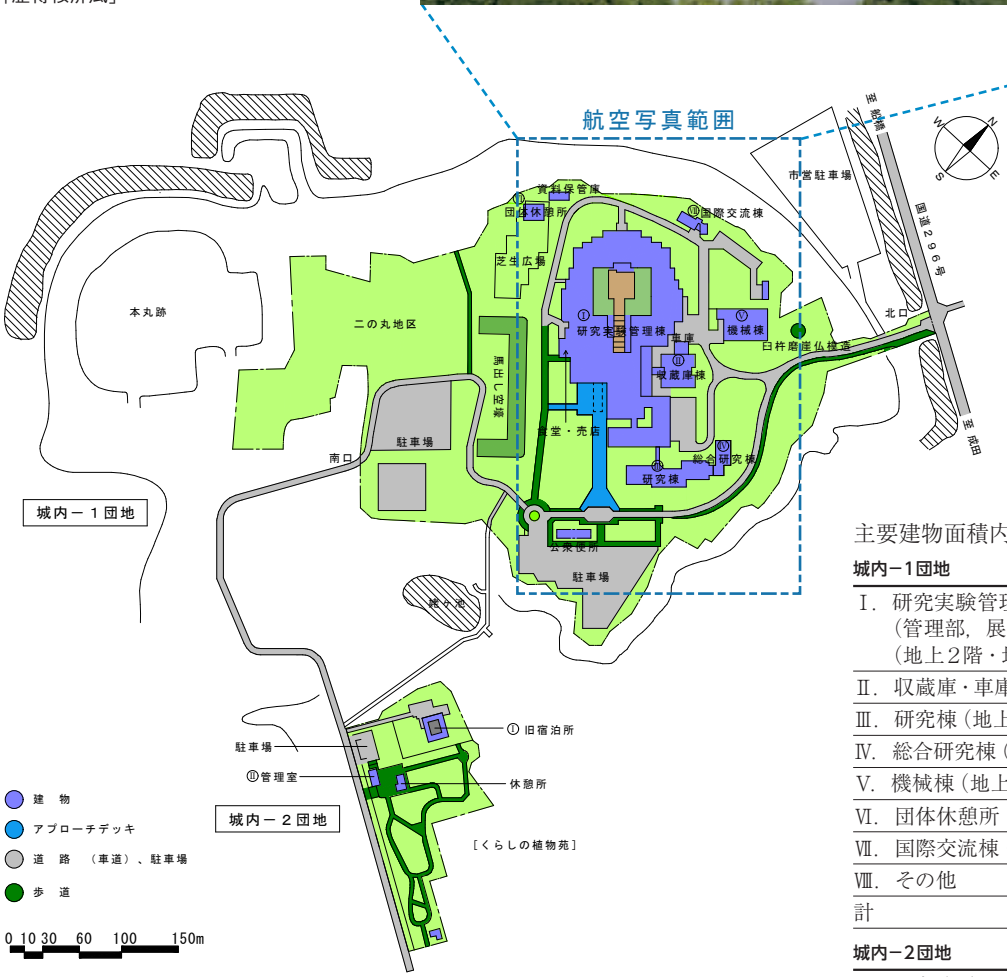
沿　革

昭和41（1966）年11月	明治百年記念準備会議（総理府）は，記念事業として「歴史民族博物館の建設」を採択し，閣議で承認。
昭和42（1967）年 8月	文化財保護委員会は，この年度から調査費を計上し，歴史博物館設立準備懇談会（座長・坂本太郎）を設立し，昭和45年末まで博物館の性格，内容について検討。
昭和45（1970）年	文化庁は，建設予定地を千葉県佐倉市に内定。
昭和46（1971）年 2月	国立歴史民俗博物館（仮称）基本構想委員会（文化庁）は，同博物館の基本構想の検討を開始。
昭和50（1975）年 4月	文化庁は，国立歴史民俗博物館（仮称）設立準備費を計上。
9月	国立歴史民俗博物館（仮称）設立準備委員会（会長・坂本太郎）発足。組織運営，展示収集，施設計画等について検討を開始。博物館の基本設計を実施。用地の一部の有償所管換を受ける。
昭和52（1977）年	主要施設建設用地（約10万㎡）の無償所管換を受けるとともに施設整備に着手。
昭和53（1978）年 4月	国立歴史民俗博物館（仮称）設立準備室（定員８名）が置かれ，井上光貞東京大学名誉教授が室長に就任。
昭和55（1980）年 5月	設立準備委員会は，「国立歴史民俗博物館（仮称）の適切な運営を確保するために，大学を中心とする全国の関係研究者の有機的な協力により調査研究，情報提供等を進める体制が必要である。」として国立民族学博物館の在り方と同様な組織運営が望ましいとの意向を表明した。
10月	本体施設が完成し，引渡し後，敷地の残り（約３万㎡）について所管換により，用地の取得が完了した。
昭和56（1981）年 4月	国立学校設置法の一部が改正（昭和56年４月14日法律第23号）され，国立大学共同利用機関として国立歴史民俗博物館が設置された。 井上光貞東京大学名誉教授・設立準備室長が初代館長に就任した（14日）～1983.2.27。
昭和58（1983）年 3月	国立歴史民俗博物館開館式典を挙行（16日）。第１展示室及び第２展示室を一般公開（18日）。
4月	土田直鎮東京大学文学部教授が第二代館長に就任した（20日）～1993.1.24。
11月	第３展示室を一般公開した（22日）。
昭和59（1984）年 3月	研究員宿泊棟が竣工した。
昭和60（1985）年 3月	第４展示室を一般公開した（12日）。
昭和61（1986）年 3月	研究棟が竣工した。
平成元（1989）年 6月	国立学校設置法の一部が改正（平成元年６月28日法律第29号）され，国立大学共同利用機関は，大学共同利用機関と改称された。
平成３（1991）年11月	創設10周年記念式典を挙行した（11日）。
平成４（1992）年 4月	企画調整官（教授併任）が設置された。
平成５（1993）年 1月	土田直鎮館長の逝去にともない，石井　進企画調整官が館長事務取扱となった（24日）～2.28。
3月	石井　進企画調整官が第三代館長に就任した（１日）～1997.8.31。 第５展示室の一部（文明開化）を一般公開した（18日）。
10月	開館10周年記念式典を挙行した（４日）。
平成６（1994）年 4月	展示支援システム（展示案内，映像・音声）のサービスを開始した（29日）。
平成７（1995）年 3月	第５展示室（産業と開拓・都市の大衆の時代）を一般公開した（18日）。
9月	くらしの植物苑を開苑し，一般公開した（14日）。
平成９（1997）年 7月	開館以来，入館者500万人を達成し，記念式典を挙行した（９日）。
9月	佐原　眞企画調整官が第四代館長に就任した（１日）～2001.8.31。
平成11（1999）年 4月	総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻が設置された。
平成13（2001）年 9月	宮地正人東京大学史料編纂所教授が，第五代館長に就任した（１日）～2005.8.31。
平成15（2003）年11月	開館20周年記念式典を挙行した（17日）。
平成16（2004）年 4月	国立大学法人法（平成15年７月16日法律第112号）により，大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館となった。４研究部を１研究部４研究系に改組，企画調整官を廃し，副館長（教授併任）を設置した。研究連携センター並びに歴史資料センターが設置された。
平成17（2005）年 9月	平川　南大学共同利用機関法人人間文化研究機構理事が館長事務取扱に就任した（１日）～2006.3.31。
平成18（2006）年 4月	平川　南館長事務取扱が第六代館長に就任した（１日）～2014.3.31。
平成19（2007）年 7月	副館長（館外担当）を設置した。研究連携センター及び歴史資料センターを，研究推進センター及び博物館資源センターに改編。広報連携センターを設置した。
平成20（2008）年 3月	第３展示室（近世）をリニューアルし，一般公開した（18日）。
平成22（2010）年 3月	第６展示室（現代）を一般公開した（16日）。
平成25（2013）年 3月	第４展示室（民俗）をリニューアル，一般公開し（19日），開館30周年記念式典を挙行した（19日）。
平成26（2014）年 3月	総合研究棟が竣工した。
4月	久留島　浩国立歴史民俗博物館教授が第七代館長に就任した（１日）～2020.3.31。
平成28（2016）年 5月	国際交流棟が竣工した。
平成31（2019）年 3月	「第２の開館」と位置づけて第１展示室をリニューアルし，一般公開（19日）。記念式典を開催（18日）。
令和２（2020）年 4月	西谷　大国立歴史民俗博物館教授が第八代館長に就任した（１日）。

施設概要

国立歴史民俗博物館（歴博）は，印旛沼を望む佐倉城跡に設置されました。平成18(2006)年2月に「日本の100名城」に選定された佐倉城は，慶長15（1610）年に徳川家康の命を受け佐倉領主となった土井利勝が，翌年から元和２（1616）年にかけて築造したといわれています。その後城主は何代か変わりますが，幕末に老中を務めた堀田正睦がよく知られています。歴博に隣接する「佐倉城址公園」は，桜の名所として知られています。

「歴博桜屏風」



国立歴史民俗博物館　佐倉城址公園内位置図

敷地面積　129,519㎡
（城内－１団地　115,256㎡）
（城内－２団地　14,263㎡）
建築面積　18,435㎡
（城内－１団地　18,021㎡）
（城内－２団地　414㎡）
延床面積　38,463㎡
（城内－１団地　38,053㎡）
（城内－２団地　410㎡）

主要建物面積内訳

城内－１団地

Ⅰ．研究実験管理棟（管理部，展示室，講堂等）（地上２階・地下１階）	22,979㎡
Ⅱ．収蔵庫・車庫（地上５階・地下２階）	6,163㎡
Ⅲ．研究棟（地上２階・地下１階）	4,636㎡
Ⅳ．総合研究棟（地上２階・地下１階）	1,512㎡
Ⅴ．機械棟（地上１階）	1,136㎡
Ⅵ．団体休憩所（地上１階）	274㎡
Ⅶ．国際交流棟（地上３階）	727㎡
Ⅷ．その他	626㎡
計	38,053㎡

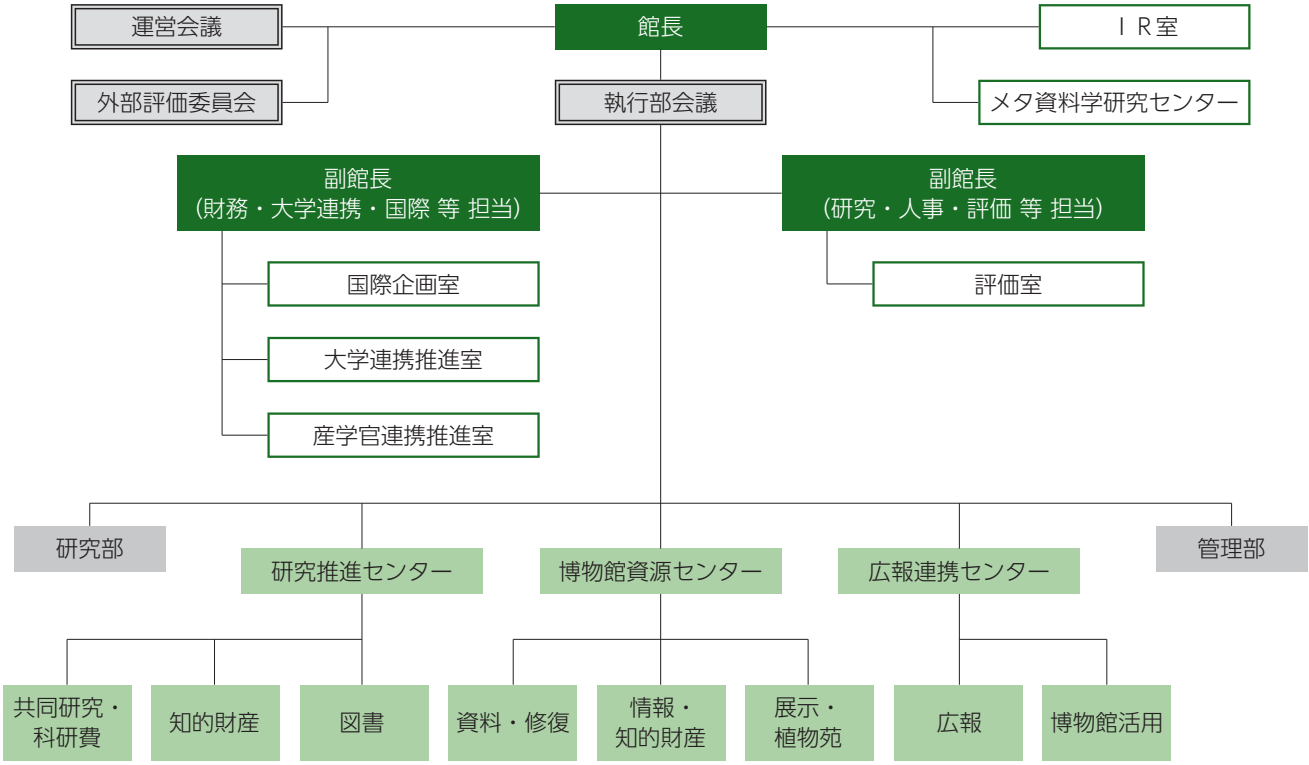
城内－２団地

Ⅰ．旧宿泊所	363㎡
Ⅱ．くらしの植物苑管理室	47㎡
計	410㎡

組織図

2016年４月に，第３期中期目標・中期計画期間の開始に合わせて，メタ資料学研究センターとＩＲ室を設置し，既存の組織である国際交流室を国際企画室に再編しました。メタ資料学研究センターは，国内外の大学・大学博物館等との連携のもと，人間文化研究機構の機関拠点型基幹研究プロジェクトである「日本歴史文化知の構築と歴史文化オープンサイエンス研究」を推進することとし，ＩＲ室は，館長のガバナンスのもと，研究・事業等に関するデータを収集・分析し，歴博の運営に資することを目的としています。また，2017年４月には，大学連携推進室を設置して，大学等との組織的な連携強化を推進するための体制を整備し，さらに2018年４月には，既存の組織を位置づけ直し，それぞれの役割を明確にしました。

外部評価委員会は，運営会議の専門委員会から独立させて設置し，共同研究等の研究プロジェクトの外部評価を行うなど，研究・事業の改善に努めています。



（2024年５月１日現在）

運営組織

館長	西谷　大	管理部長	野田　好人
副館長（研究総主幹併任）	内田　順子	総務課長	渡邉　孝
副館長	山田　慎也	財務課長	矢島　大彰
研究推進センター長	小倉　慈司	研究協力課長	富田　博明
博物館資源センター長	坂本　稔	博物館事業課長	立和名啓人
広報連携センター長	鈴木　卓治	広報課長	鈴木　卓治
総合研究大学院大学日本歴史研究コース長	三上　喜孝		

運営会議委員等

（2024年5月1日現在）

運営会議

〔外部委員〕

市澤　哲	神戸大学大学院人文学研究科教授
梅﨑　昌裕	東京大学大学院医学系研究科教授
江村　知子	東京文化財研究所文化財情報資料部部長
小畑　弘己	熊本大学大学院人文社会科学研究部教授
木川　りか	九州国立博物館学芸部博物館科学課長
坂上　康俊	九州大学名誉教授
鈴木　淳	東京大学大学院人文社会系研究科教授
徳丸　亜木	筑波大学人文社会科学研究科教授
Bruce BATTEN	アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター所長
村上　恭通	愛媛大学アジア古代産業考古学研究センター長・教授
山田　賢	千葉大学大学院人文科学研究院教授

〔内部委員〕

内田　順子	副館長・研究総主幹
山田　慎也	副館長
小倉　慈司	研究推進センター長
坂本　稔	博物館資源センター長
鈴木　卓治	広報連携センター長
三上　喜孝	総合研究大学院大学日本歴史研究コース長
大久保純一	教授
関沢まゆみ	教授
高田　貫太	教授
林部　均	教授

■将来計画委員会

〔外部委員〕

小畑　弘己	熊本大学大学院人文社会科学研究部教授
坂上　康俊	九州大学名誉教授
梅﨑　昌裕	東京大学大学院医学系研究科教授
Bruce BATTEN	アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター所長

〔内部委員〕

鈴木　卓治	広報連携センター長
坂本　稔	博物館資源センター長
高田　貫太	教授
関沢まゆみ	教授

■共同研究委員会

〔外部委員〕

山田　賢	千葉大学大学院人文科学研究院教授
木川　りか	九州国立博物館学芸部博物館科学課長
村上　恭通	愛媛大学アジア古代産業考古学研究センター長・教授
安藤　広道	慶應義塾大学文学部教授
岩淵　令治	学習院女子大学国際文化交流学部教授
佐賀　朝	大阪公立大学大学院文学研究科教授
藤井　弘章	近畿大学文芸学部教授

〔内部委員〕

小倉　慈司	研究推進センター長
鈴木　卓治	広報連携センター長
高田　貫太	教授
林部　均	教授
大串　潤児	教授

■資料収集委員会

〔外部委員〕

市澤　哲	神戸大学大学院人文学研究科教授
江村　知子	東京文化財研究所文化財情報資料部部長
青木　歳幸	佐賀大学地域学歴史文化研究センター特命教授
岩崎　均史	静岡市東海道広重美術館館長
香川　雅信	兵庫県立歴史博物館学芸課長
酒井　清治	駒澤大学名誉教授

〔内部委員〕

坂本　稔	博物館資源センター長
大久保純一	教授
三上　喜孝	総合研究大学院大学日本歴史研究コース長
若木　重行	准教授

外部評価委員会

〔外部委員〕

浅野　秀剛	大和文華館館長
小川　義和	立正大学地球環境科学部教授・埼玉県立川の博物館館長
奥村　弘	神戸大学理事・副学長
小澤　弘明	千葉大学理事
白井　哲哉	筑波大学図書館情報メディア系教授
古家　信平	筑波大学名誉教授

研究部

歴博の研究の特徴は，博物館の形態をとる大学共同利用機関としてその研究成果の発信をする点にあります。その際とくに，①歴史資料や情報の収集，調査・研究，展示・出版など多様な方法による研究と成果の発信という博物館の特徴を活かした研究統合，②文献史学，考古学，民俗学，さらに自然科学などの諸科学の学際的協業，③客員や館内外の研究者と共同して推進される共同研究，を基軸にしていることです。

その母体となるのが研究部であり，この特徴ある研究機能をよりいっそう推進するために，2004年からは従来の4研究部が統合され1研究部となりました。組織規程では研究系を置くこととありますが，ここでは教員について，情報資料，歴史，考古，民俗の4研究分野ごとに紹介します。

（2024年5月1日現在）

館　長　西谷　大：生業の歴史的変遷，焼畑，水田，マーケット

情報資料研究系（分野）

教　授　大久保純一：浮世絵，江戸後期の風景表現
教　授　齋藤　努：自然科学的な手法を用いた歴史資料の材質，物性，技法，産地などに関する研究
教　授　坂本　稔：同位体分析に基づく歴史・考古資料の年代測定
教　授　鈴木　卓治：博物館における研究・展示・広報を支援するシステムの研究，色彩と画像の情報処理
教　授　日高　薫：蒔絵を中心とする漆工芸史
准教授　小瀬戸恵美：歴史資料の自然科学的手法による分析，博物館展示の評価手法の研究
准教授　澤田　和人：衣材・染織技術・服飾観の相関性に関する研究，室町時代を中心とする法衣の研究
准教授　島津　美子：化学分析による色材の同定，彩色資料の技法材料研究
准教授　後藤　真：人文情報学・総合資料学・正倉院文書および博物館資料の情報化による分析・発見手法の研究
准教授　箱﨑　真隆：年輪幅および酸素同位体比の長期標準年輪曲線の確立を目指す研究
准教授　橋本　雄太：人文情報学，近代西洋科学史，歴史資料に関する学習支援とクラウドソーシング
准教授　若木　重行：先端的同位体分析を活用した歴史・文化財・自然資料の産地・食性・形成過程・環境復元に関する研究
准教授　鷲頭　桂：日本中世・近世の絵画史，日本美術における対外交流史

歴史研究系（分野）

教　授　仁藤　敦史：都城制成立過程の研究，古代王権論，古代地域社会論
教　授　樋口　雄彦：明治期の社会・文化と旧幕臣の動向
教　授　小倉　慈司：古代神祇制度の研究，禁裏・公家文庫の研究，延喜式の研究，渡辺村史研究
教　授　三上　喜孝：古代東アジア文字文化交流史の研究，古代貨幣史研究，古代・中世地域社会の実態的研究
教　授　大串　潤児：戦時戦後（20世紀），地域社会における青年や女性の社会文化運動を中心とする日本現代史
准教授　樋浦　郷子：帝国日本の教育と宗教
准教授　福岡万里子：近世近代転換期の東アジアをめぐる国際関係史，幕末維新期の日本とドイツ・アメリカ・オランダとの関係を中心に
准教授　吉井　文美：近代日本の対中政策とその国際的影響，日本の帝国支配をめぐる外交史的研究
准教授　天野　真志：日本近世・近代移行期における政治・文化史，地域歴史文化の保存と継承に向けた研究
准教授　工藤　航平：日本近世地域史，知識の形成・共有・継承と社会変容に関する研究，民間の編纂物・蔵書
准教授　佐川　享平：炭鉱における労働社会史，炭鉱関係資料の保全・活用
助　教　吉村　郊子：人−自然，人−人のかかわりに関する人類学的研究
テニュアトラック助　教　土山　祐之：環境史・災害史と中世荘園制研究，中世村落史研究，地域景観変遷史の研究

考古研究系（分野）

教　授　林部　均：日本古代における王宮・王都の形成過程の研究，考古学からみた古代地域社会の研究
教　授　松木　武彦：古墳時代における国家形成過程の検討，武器・戦争・軍事組織の考古学的研究，進化・認知科学を用いた考古学・歴史学の方法理論

教　授　高田　貫太：古代の日朝関係についての考古学的研究
准教授　上野　祥史：漢三国六朝期の古代東アジア世界の展開
准教授　村木　二郎：中世の考古学的研究
准教授　中村　耕作：縄文時代を中心とした土器・葬墓制からみたモノ・身体論
テニュアトラック助　教　山下　優介：弥生時代・古墳時代の交流関係や社会の変化

民俗研究系（分野）

教　授　小池　淳一：民俗信仰，民俗学史，万年筆を中心とする文字文化
教　授　関沢まゆみ：社会と儀礼の民俗学的研究
教　授　松尾　恒一：民俗宗教・民間信仰と儀礼・芸能，職能者の祭儀と呪術，東アジアにおける比較民俗
教　授　山田　慎也：葬制と死生観，現代社会と民俗，死生学
教　授　内田　順子：民俗文化に関する映像・音響資料の博物館学的研究，民俗音楽の伝承方法に関する研究
准教授　青木　隆浩：酒造業，社会規範の形成過程
准教授　川村　清志：祭礼と民俗芸能の現代的展開，メディアの民俗表象とフォークロリズム
准教授　松田　睦彦：生業の技術および生業をとりまく信仰・儀礼・社会組織等の生活文化に関する総合的研究

特任研究員

特任教授　荒川　章二：近代日本の軍隊と地域関係史，戦後日本研究
特任准教授　佐野　雅規：樹木年輪による過去の気候復元と木材の年代決定
特任助教　川邊　咲子：地域の民具資料とその情報の保存・活用についての研究，モノと人との関係性についての人類学的研究，文化資源学
特任准教授　小野塚航一：日本中世の地方寺院経済史，「勝尾寺文書」の形成と伝来，地域歴史資料の保全と活用
特任准教授　大井　将生：学際情報学・教育学，デジタル文化資源の活用に関する研究
特任助教（人文知コミュニケーター）　アルト ヨアヒム：表象文化論，日本アニメにおける第二次世界大戦・アジア太平洋戦争の表象

客員教員

（2024年5月1日現在）

	職名	氏名	担当プロジェクト等
1	客員教授	山田　康弘	①総合展示第1室「先史・古代」におけるWiFi活用についての検討並びにデジタルコンテンツ制作 ②博物館資料調査プロジェクト（縄文文化関連の考古資料）
2	客員教授	是澤　紀子	中近世の神社建築にみる伝播と再生に関する研究，建築史資料の調査研究（館蔵天沼俊一旧蔵資料）
3	客員准教授	春日　　聡	歴博で実施する映像関連イベントや展示等，映像による研究成果の発信方法についての研究・企画立案

特別客員教員

（2024年5月1日現在）

	職名	氏名	担当プロジェクト等
1	特別客員准教授	鈴木　琢也	基幹研究「交流・環境からみたオホーツク文化・擦文文化，アイヌ文化－その成立・展開過程－」
2	特別客員教授	佐々木憲一	基幹研究「東アジアからみた関東古墳時代開始の歴史像」
3	特別客員准教授	田中　祐介	基盤研究「近代東アジアにおけるエゴ・ドキュメントの学際的・国際的研究」
4	特別客員教授	田中　大喜	基盤研究「中世日本の地域社会における都市の存立と機能の研究」
5	特別客員准教授	小幡　圭祐	基盤研究「「地域アーカイブ」の形成過程と郷土史家の役割に関する総合的研究」
6	特別客員教授	阿部　昭典	基盤研究「小渡遺跡を中心とする十腰内文化の研究」
7	特別客員准教授	髙田　宗平	基盤研究「平田篤胤関係資料の漢籍受容に関する総合的研究」

非常勤研究員

（2024年5月1日現在）

プロジェクト研究員	3人
科研費支援研究員	1人
RA（リサーチアシスタント）	4人

メタ資料学研究センター

メタ資料学研究センターは，国内外の大学・大学博物館等との連携のもと，人間文化研究機構の機関拠点型基幹研究プロジェクトを推進するため，2016年4月に発足しました。これまでのプロジェクトの成果を引き継ぎつつ，新たなプロジェクト「日本歴史文化知の構築と歴史文化オープンサイエンス研究」に取り組んでいます。

「日本歴史文化知」とは，地域における歴史資料（地域歴史資料）をはじめとする様々な歴史資料の多様なデータ構築とその高度なデータの研究を，歴史資料分析に即して進める「人文情報学的研究」と，そこから得られたデータを用いつつ，地域の人々と協働して資料の継承を考え，地域歴史資料研究を推進する「地域歴史協働研究」の相互連携にもとづく，研究プロセスと研究成果の総体を指します。

日本歴史文化知の研究プロジェクトは，以下の2つのユニットにより構成されており，一体となって研究を進めています。

■1．人文情報ユニット

歴史資料の情報学的な分析研究手法と，より多様な情報発見の手法を開発するとともに，それらのデータを他分野の専門家や非研究者にも使えるようにする仕組みの検討を行います。また，歴史資料データを使うだけではなく，クラウドソーシングをはじめとする，歴史資料データを多くの人が参画しながら豊かにすることができるような手法の検討も行います。また，人文情報学の国際会議等にも積極的にコミットし，海外諸機関とも連携を進めます。

■2．地域歴史協働ユニット

データ化された資料の活用などを通じ，地域の人々とともに歴史や文化を継承するあり方について検討するとともに，歴史資料を社会に開くための諸課題について検討します。また，歴史資料概念の広がりや，資料を取り巻く諸課題の変容，日本社会の高齢化などにともなう資料の消失の課題などに取り組み，歴史資料をどのように適切に共有し，データ化するかなどの検討を行い，それらの地域歴史資料研究の成果などを，人文情報学研究にフィードバックします。

構成員

■メタ資料学研究センター長	山田　慎也	副館長
■メタ資料学研究副センター長	後藤　　真	准教授
■メタ資料学研究センター員	三上　喜孝	教授
	小倉　慈司	教授
	工藤　航平	准教授
	天野　真志	准教授
	橋本　雄太	准教授
	小野塚航一	特任准教授
	大井　将生	特任准教授
	川邊　咲子	特任助教

公式ホームページ

https://www.metaresource.jp/

総合資料学情報基盤 khirin
(Knowledgebase of Historical Research in Institutes)

https://khirin-ld.rekihaku.ac.jp/

■共同利用性の向上

大学・大学共同利用機関法人・自治体などとともに，情報基盤システムの整備を進めています。その一環として，歴史文化資料の情報基盤システム・khirin（Knowledgebase of Historical Research in Institutes）を構築，複数の機関のデータを，画像・目録などさまざまな形で公開しています。今後もさらにデータ拡充と，システム整備を進め，文理問わず，より研究利用しやすい形でのデータの共同利用を進めます（30ページ参照）。

都内貸会議室ならびにオンラインにてユニット研究会「歴史データ利用の「その先」」
2023年12月15日

研究推進センター

歴博は大学共同利用機関として，館外の研究者をも加えた共同利用を積極的に推進することを使命としています。また，人間文化研究機構の一員として，機構内外の研究機関との連携を図ることも重要な課題です。研究推進センターは，このような研究に関わる共同利用の推進母体であり，また歴博の理念である「博物館型研究統合」を実践する組織として発足しました。具体的には，共同研究担当，科研費担当，国際交流担当，知的財産担当，図書担当を配置して，その運営にあたっています。

共同研究担当は，館内外の研究者で組織する共同研究を中心とした研究活動の総合的推進を行っています。また研究活性化のため，科研費担当も置き，科学研究費など外部資金の獲得にむけた支援も行っています。

国際交流担当は，外国人研究者の招へい，国際シンポジウム・国際研究集会の計画，国際交流協定の締結などを進める国際企画室と連携を図りつつ，研究活動の国際的広がりの積極的な推進を行っています。

知的財産担当は，知的財産委員会と連携し，研究成果の著作権を中心とした知的財産の創出，管理およびその適正な運用を行っています。

図書担当は，図書室の規約・利用規定の制定，収蔵施設計画，収蔵図書・雑誌の選定等を行い，歴博の研究活動全体を支える研究環境整備の役割を担っています。

構成員

■研究推進センター長	小倉　慈司	教授
■共同研究担当	大串　潤児	教授
	小池　淳一	教授
	村木　二郎	准教授（科研費担当兼務）
■知的財産担当	島津　美子	准教授（国際交流担当兼務）
■図書担当	後藤　　真	准教授

基幹研究における，東奥義塾高等学校での弘前藩校旧蔵書の調査風景

基盤研究におけるアメリカと日本の学校給食をテーマにオレゴン健康科学大学ポートランド州立大学 Betty T. Izumi 准教授を招いて行われた公開研究会の様子

開発型共同研究研究会の様子

共同利用型共同研究調査風景

共同研究

大学共同利用機関としての歴博の共同研究は，実証性・学際性・国際性を特徴とし，国内外の研究者の参加を得て実施する，日本の歴史と文化に関する研究プロジェクトです。

共同研究には,「人間文化研究機構基幹研究プロジェクト・共創先導プロジェクト」「基幹研究」「基盤研究」「開発型共同研究」および「共同利用型共同研究」の5つの種別があります。人間文化研究機構基幹研究プロジェクト・共創先導プロジェクトは，人間文化の新たな価値体系の創出に向け，国内外の研究機関や地域社会等と組織的に連携し，また人間文化研究機構の研究展開を一層強化することを目指すものです。基幹研究（Principal Research）は，歴博の取り組む中心的な研究であり，先端的な歴史研究の開拓を目指す資料論的かつ方法論的な挑戦的研究や，日本の歴史と文化を広く通史的な視点に立って研究する現代的課題研究からテーマが設定されます。基盤研究（Fundamental Research）は，考古・歴史・民俗の資料に基づく実証的で学際的な研究であり，基盤研究1（課題設定型），基盤研究2（館蔵資料型）および基盤研究3（歴博研究映像）があります。開発型共同研究(Developmental Research)は，歴博の助教を対象として，新規課題発掘と人材育成に取り組むものです。また，2018年度より，外部の若手研究者を対象として所蔵資料および分析機器・設備を利用した共同利用型共同研究（Collaborative Access Type Joint Research）が開始されました。

人間文化研究機構基幹研究プロジェクト・共創先導プロジェクト

1．日本歴史文化知の構築と歴史文化オープンサイエンス研究（2022年度～）

「日本歴史文化知」とは，情報基盤・歴史の専門知・多様な知（非職業研究者による知）の協業による研究プロセスのオープン化と，高度な研究成果の総体を指します。「総合資料学の創成」事業（2016 ～ 21年度）の成果を継承し，歴史文化研究の課題意識にもとづいた人文情報学的な解析と，データネットワーク構築，そしてそれらを活用した地域との協働研究を進めます。

（国立歴史民俗博物館・情報資料研究系　准教授　後藤　真　他44名）

2．フィールドサイエンスの再統合と地域文化の創発（2022年度～）

本プロジェクトは，慢性的な過疎化・高齢化，突発的な災害などで疲弊する地域社会と，そこで育まれてきた地域文化の継承・保存と振興・活用のための実践的研究を推進します。多様なフィールドサイエンスの研究者と地域文化の担い手との協働調査・研究を通じて既存の社会集団を再構成し，緩やかな文化資源の共有と開かれたコミュニティーモデルの創発を目指します。

（国立歴史民俗博物館・民俗研究系　准教授　川村清志　他25名）

3．同位体による年代・古気候・交流史研究（2022年度～）

炭素14年代法や酸素同位体比年輪年代法などに基づく年代測定と古気候復元から，自然と人の関わりの変遷を明らかにします。年代測定の精度向上を実現するための各地のクロノロジー構築，海洋リザーバー効果の検討，較正曲線の整備などを行うとともに，鉛同位体比分析からモノの動きや活用状況を追究し，社会的背景の影響を受けた人間文化のあり方を解明します。

（国立歴史民俗博物館・情報資料研究系　教授　坂本　稔　他6名）

4．延喜式のデジタル技術による汎用化（2022年度～）

多様な情報を有し,「古代の百科全書」とも言える『延喜式』について，国際標準に準拠した写本画像・校訂本文・現代語訳・英訳が連動するデータベース「デジタル延喜式」を作成・発信し，日本古代史のみならず東アジア史や科学技術史等，様々な分野からの『延喜式』利活用を目指します。　（国立歴史民俗博物館・歴史研究系　教授　小倉慈司　他22名）

5．歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業（2022年度～）

人間文化研究機構（主導機関：歴博），東北大学，神戸大学を中核として，全国各地の大学等を中心に活動する「資料ネット」等との連携を通じて，地域社会における資料の保存・継承のあり方を検討し，資料を活用した研究や教育プログラムの開発，国内外に向けた情報発信を通じて，地域社会における歴史文化の継承と創成を目指します。

（国立歴史民俗博物館・歴史研究系　教授　三上喜孝／准教授　天野真志　他32名）

6．外交と日本コレクション－19世紀在外日本資料の世界史的文脈による研究と現地およびオンライン空間における活用（2022年度～）

在外日本関係資料のグローバルな文脈による多視点的調査研究を通じて，19世紀における日本と欧米諸国との外交関係や政治・経済・社会・文化交流における《もの》の役割について探求します。また，資料の現地活用やリモート環境・オンライン

空間における活用を促進することによって，日本研究の活性化や日本文化理解の深化を目指します。

（国立歴史民俗博物館・情報資料研究系　教授　日高　薫　他42名）

基幹研究

◇環境や交流からみた日本歴史の動的研究

1．交流・環境からみたオホーツク文化・擦文文化，アイヌ文化ーその成立・展開過程ー（2022年度～）

古代北海道では，本州の「古代」にあたる時期に，オホーツク文化（５～９世紀），擦文文化（８～12世紀）が展開しました。本研究では，オホーツク文化・擦文文化をめぐる本州の古代国家や大陸の諸国家・文化との交流の様相，その交流を支えたそれぞれの社会の実態，交流による社会変革の具体的な様相を，考古学的な手法を中心としつつも，酸素同位体比年輪年代法などの環境史的な視点も加えて学際的に分析することにより，東北アジア史の中にオホーツク文化・擦文文化を正しく位置づける作業をおこないます。そのうえで，アイヌ史「古代」から「中世」への展開過程を再構築します。

（北海道博物館　学芸主幹　鈴木琢也　他14名　国立歴史民俗博物館・考古研究系　教授　林部　均）

2．東アジアからみた関東古墳時代開始の歴史像（2022年度～）

本研究は，関東における古墳時代開始の複雑なプロセスに，地域間交流を含めた様々な観点から実証的に迫り，統合的な歴史像を再構築することを目的としています。そのために，これまで各県ごとに叙述されてきた関東の古墳出現プロセスを，土器・埴輪などの資料の分析，光ルミネッセンス年代測定，および東北・北海道や中国・朝鮮半島との交流を示す文物を検討対象として，実証的方法ならびに広域的・国際的な背景を踏まえて復元する作業を行います。このことによって，これまでの畿内中心的枠組みにとらわれない，広狭複雑な地域間交流の中から，古墳時代関東の地域社会が形成されていったプロセスと歴史的意義とを解明します。　（明治大学　教授　佐々木憲一　他16名　国立歴史民俗博物館・考古研究系　准教授　上野祥史）

3．先史から近代における日朝交流史像の再構築ー航海・港市・交流に生きた人びとの視点からー（2022年度～）

本研究は弥生時代から近代に至るまでの日本列島と朝鮮半島との交流の歴史を，これまで考古学・文献史学・民俗学等の個別分野において積みあげられてきた研究成果の接合を図ることによって，通史的に明らかにすることを目的としています。とくに，本研究では国家や民族を単位とした交流ではなく，みずから海を渡った人びと，あるいは，そうした人びとと直接交流を持った人びとを対象とし，通史的観点からその交流の実態を描き出します。具体的には，日本列島と朝鮮半島との間を往来した人びとの交流の目的，造船や航海の技術，航路や寄港地，やり取りされた文化や技術について，時代ごとの変動や持続の様相を強く意識しながら通史的に明らかにします。　（国立歴史民俗博物館・民俗研究系　准教授　松田睦彦　他11名）

◇生と死をめぐる歴史と文化

4．高齢多死社会における生前から死後の移行に関する統合的研究（2023年度～）

この研究は，高齢多死社会の現代において老いを含めた生前から死後までの人々の営為を，統合的に捉えるために学際的観点から検討し，現代日本社会の生と死の観念と諸相を明らかにすることを目的としています。生前は医療や福祉，介護の専門家が関与し，また死後は葬儀産業や宗教者，墓石霊園業者などにより対応がなされています。それは専門家の依存が進んで両者は分断されており，この分断は研究においても同様です。とくに個人化が進む現代においては，生前から死後への一貫した視点が，実践においても研究においても求められています。そこで両者を架橋し統合的に考察することで，人々の生と死の有り様を多様な面から明らかにしていきます。　（国立歴史民俗博物館・民俗研究系　教授　山田慎也　他13名）

5．死者への行為が形成する認識と社会変容（2023年度～）

死の扱いには，人間とはいかなる存在かという認知が反映されています。神への供犠や故人の神格化が象徴するように，死や人間のとらえ方は，死者とのかかわり－行為の実践－のなかで顕在化しました。死者とのかかわりは，葬送に限定してとらえることが多いものの，特定の時間には限定されません。行為（儀礼）や物証（遺品）を通じて，不可視な死者を実体化（物質化）させることも，死者とのかかわりの一つです。歴史学，考古学，民俗学を含む人文学の諸分野では，死者へのかかわりに対して多くの知見や認識を蓄積してきました。しかし，議論の前提や検討対象の違いを背景に，研究分野や時空をこえた比較検討は低調です。

本研究では，死者をめぐる行為の実践に主眼を置き，神霊など不可視な存在の実体化（物質化）との比較を通して，認知や思考の形成と行為の実践・反復との関係を検討します。研究分野や対象時空間を横断した議論を展開し，人類史研究に有益な検討視点の確立を目指します。それは，長子相続や直系継承を自明の帰結とみるような，歴史の変化を不可逆な発展や進化ととらえる現代的思考への人類学研究からの提言ともなります。（国立歴史民俗博物館・考古研究系　准教授　上野祥史　他12名）

基盤研究

◇課題設定型

1．近代東アジアにおけるエゴ・ドキュメントの学際的・国際的研究（2022年度～）

本研究では近世末期から近代にかけての日本およびアジア隣国で綴られた日記，手紙，作文，自伝などの個人文書（エゴ・ドキュメント）を題材に，有名無名の人々の書き綴る営みから歴史を描く可能性を探り，その方法論を練磨するとともに，発展的な研究を見据えた学際的・国際的な体制の基盤を構築することを目的としています。具体的には，歴史学および文学研究の方法論を中核に，教育史学，思想史学，メディア史学，社会学，文化人類学の知見も援用した学際的な研究体制を整備するとともに，個人文書研究を推進する韓国・台湾の研究機関と連携し，将来的な協働を推進するための国際的な研究体制の基盤を構築します。　（明治学院大学　専任講師　田中祐介　他11名　国立歴史民俗博物館・歴史研究系　教授　三上喜孝）

2．中世日本の地域社会における都市の存立と機能の研究（2022年度～）

本研究は，中世の文献資料上に「宿」・「津」・「湊」・「泊」といった言葉で現れる，地域社会において恒常的な物流が行われた集散地を都市と把握し，その存立と機能のあり方を具体的に明らかにすることを目的としています。

この目的に迫るうえで，本研究では，文献・考古両資料と先行研究の蓄積に恵まれた東国と西国の具体的な地域の事例に即して追究します。すなわち，東国では上野国世良田宿を，西国では安芸国沼田市をフィールドに設定し，①中世の文献・考古両資料の精査による基礎データの収集・分析，②近世・近代資料（地誌・絵図等）の精査と現地調査による地理的景観の復元および領主拠点との関係の分析を行い，①・②の成果の総合化によって目的にアプローチします。

（日本大学　教授　田中大喜　他10名　国立歴史民俗博物館・考古研究系　准教授　村木二郎）

3．顔身体土器の通文化比較にみる身体・モノ認識（2024年度～）

縄文時代には顔面把手付深鉢など顔・身体表現をもった土器が，特定の時期・地域に集中して出現します。鍋・皿・壺・土瓶など多様な器種で形に合わせて造形され，顔や性器の部分を破壊することもあり，出現の社会背景を含めて研究が蓄積されています。本研究では，弥生時代，中国新石器時代，マヤ，アンデス，現代のパプアニューギニアなどの顔・身体をもった土器を取り上げ，個々の造形の特徴や出現プロセスなどを総合的に比較し，それぞれの文化・社会における顔・身体認識やモノ認識の特徴を浮かび上がらせたいと考えています。　（国立歴史民俗博物館・考古研究系　准教授　中村耕作　他11名）

4．「地域アーカイブ」の形成過程と郷土史家の役割に関する総合的研究（2024年度～）

本研究は，地域の歴史を知るうえできわめて重要な地域資料を「地域アーカイブ」と位置づけ，それらの資料の収集・整理・保存・提供に関する「地域アーカイブズ学」の構築の第一歩として，「地域アーカイブ」の収集・保存の歴史的経緯を考察するとともに，その中で近代の郷土史家がはたした役割を検討するものです。

具体的には，山形県で活躍した伊佐早謙（1858～1930），三浦新七（1877～1947）といった近代の郷土史家の活動とその活動を支えた思想を検討することで，「地域アーカイブ」の収集・保存に果たした郷土史家の役割を解明し，彼らの目指した「地域アーカイブ」像を精緻に解明します。これらをモデルケースとし，他の地域にも敷衍できるような「地域アーカイブズ学」の構築をめざします。　（山形大学　准教授　小幡圭祐　他9名　国立歴史民俗博物館・研究部　准教授　天野真志）

◇館蔵資料型

5．小渡遺跡を中心とする十腰内文化の研究（2023年度～）

小渡遺跡は，縄文時代後期，北東北で環状列石や再葬墓が盛んにつくられ，深鉢以外に壺を多用する特徴を持った「十腰内文化」の遺跡です。本研究では，小渡遺跡出土の土器・土製品・石器・石製品について，各分野の専門家とともに，①他地域の土器との装飾の比較や年代測定によって年代的位置づけを確定し，②植生や生業活動を解明するための道具としての土器や石器の分析，③モノや人の動きを明らかにするための石材分析や土器胎土分析，④儀礼行為を復元するための土製品や石製品等の分析を行います。これらから，「十腰内文化」の実態解明とともに，小渡遺跡や周辺遺跡の地域性を明らかにすることを目指しています。　（千葉大学　教授　阿部昭典　他11名　国立歴史民俗博物館・考古研究系　准教授　中村耕作）

6．平田篤胤関係資料の漢籍受容に関する総合的研究（2024年度～）

本研究では，平田篤胤における漢籍受容を学際的・総合的に検討することで，幕末期の知識人の漢籍知の解明を目指します。平田篤胤に関する研究は，日本近世史・近代史や思想史の分野で国学（古道学）を中心に重厚な研究が蓄積されている一方，漢籍由来の学問・思想の実態は未解明であり，全体像が明らかになっているとはいえません。そこで，篤胤思想形成の根幹を成したと推される，医道，暦学，易学，玄学に関する資料を対象に，漢学がどのように理解され，また独自に活用されたのか，篤胤独自の受容の分析を行います。さらに，資料群のアーカイブズ学的分析や，これまで注目されてこなかった漢籍関係資料の研究資源化を図り，今後の研究の基盤構築に取り組みます。

（中央大学　兼任講師　髙田宗平　他14名　国立歴史民俗博物館・歴史研究系　准教授　工藤航平）

◇歴博研究映像

7．歴博研究映像の総合的活用の方法論の構築－沖縄地域の映像を中心に（2022年度～）

日本列島の歴史・民俗文化の研究の一環として，歴博が1988年以来実施してきた研究映像制作の成果に基づき，沖縄県の

民俗文化を対象とする歴博研究映像のアーカイブ映像や収集した映像等を活用して，民俗宗教行事・生活文化における植物利用など，新たなテーマで現地調査・撮影等を実施することにより，映像記録の蓄積をはかります。また，上映会や展示等で広く公開・活用するほか，オンラインでの提供を推進するなど，総合的な利活用を目指します。

（多摩美術大学　非常勤講師　春日　聡　他7名　国立歴史民俗博物館・民俗研究系　教授　内田順子）

開発型共同研究

1．弥生時代の洪水災害に対する人びとの選択と社会の変化

洪水は人びとが常に向き合ってきた自然災害の一つであり，それは弥生時代も同様です。本研究は，弥生時代における洪水の実態や，それに対する人びとの行動選択の内容，またその選択によりどのような社会変化が生じたかを考察することを目的としています。集落遺跡，植物遺体，弥生土器を対象とした考古学的な分析や年代学的な分析を基礎として，洪水の発生時期やその前後に生じた集落の変化，あるいは地域をまたいだ土器の移動現象を把握し，それらの連動性や関係性を検証します。洪水と弥生時代後半期の社会変化を論じるうえで重要な近江地域（滋賀県域）の資料に対する分析を軸に据え，時代や地域を超えた各地の洪水への対応のあり方との比較検討を通じて，先史時代における洪水災害への対応モデルの構築を目指します。

（国立歴史民俗博物館・研究部　テニュアトラック助教　山下優介　他12名）

2．中世民衆生活史像の再構築－気候変動・自然災害と民衆生活との相関関係を探る－

本研究は，気候変動や自然災害といった環境的要因と人々の生活との相互関連性を追究し，気候変動や自然災害に応答する地域社会の実態を究明した上で，中世民衆生活史像を再構築することを目的とします。気候変動や自然災害を特異なものとするのではなく常に生活の背景にあるものと認識し，古気候復元や地質調査など最新の自然科学分野の成果を環境的要因把握のベースに据え，福井県九頭竜川河口域一帯にて実施する現地調査（水利灌漑調査・聞き取り調査・古文書調査など）から，災害イベントの発生と集落景観の変遷，環境的要因と信仰の拡がりとの関係性などを追求します。

（国立歴史民俗博物館・研究部　テニュアトラック助教　土山祐之　他9名）

共同利用型共同研究

■館蔵資料利用型

No.	研究課題	研究代表者（館内教員）	所属・職名
1	漢代画像石墓の画題配置と地域性	岩﨑　志保 （上野　祥史）	岡山大学文明動態学研究所・准教授
2	「広橋家旧蔵記録文書典籍類」の分析による戦国期朝廷と地域権力との関係－広橋兼秀関係史料を中心に－	藤立　紘輝 （三上　喜孝）	九州大学大学院人文科学府・博士後期課程
3	鎌倉期古記録を用いた都城空間認識の検討	井上　正望 （小倉　慈司）	埼玉学園大学・講師
4	渡辺重石丸の儒教批判言説をめぐる書誌学的・思想史的検討	ジェレミー　ウッド （天野　真志）	天理大学・講師
5	日本の葬儀の自由化・無宗教化に伴う音楽演出の変遷と現在	田井みのり （山田　慎也）	東京都立大学大学院人文科学研究科・博士後期課程

■分析機器・設備利用型

No.	研究課題	研究代表者（館内教員）	所属・職名
6	白亜紀末の天体衝突クレーター内の岩石に記録されたストロンチウム同位体変動を探る	山口　耕生 （若木　重行）	東邦大学・准教授

博物館資源センター

博物館資源センターは，資料を収集・保存し，展示やデータベース等として公開する諸事業を，企画・推進することを目的に設置された組織です。博物館資源センター長のもと，資料・修復担当，情報・知的財産担当，展示・植物苑担当の教員が配置され，それぞれの業務を所掌する管理部の職員と協働して事業を推進しています。

資料・修復担当は，博物館資料の収集・調査・修復・管理等を担当しています。中長期的な計画に基づいた資料収集を行い，収蔵庫で保管しています。また，展示や研究で活用するため，複製資料の製作も積極的に行っています。

さらに，総合的有害生物調査や温湿度調査，資料コンディション調査などを行い，資料保存環境の改善に努めています。

資料の情報や写真は，ホームページ等で公開しているほか，大型コレクションは，館内外の研究者で組織した資料調査研究プロジェクト等によって調査を行い，『資料目録』や『資料図録』として刊行しています。また，資料そのものについては，熟覧や即日閲覧等によって研究者の利用に供しています。

情報・知的財産担当は，データベースの構築・維持管理，知的財産の管理等を担当しています。所蔵資料の調査やさまざまな研究で得られた情報をデータベースとして広く研究に供する一方，これらの情報や画像データなど，歴博がもつ知的財産の管理も行っています。

展示・植物苑担当は，総合展示，企画展示，くらしの植物苑の特別企画，人間文化研究機構の構成機関等が連携して企画・実施する展示の計画・立案・調整と管理運営等を担当しています。歴博の展示は，館内外の研究者で組織した展示プロジェクト等の最新の研究成果を広く一般に公開するもので，なかでも常設の総合展示は，先端的かつ最新の研究成果を取り入れながら順次リニューアルに取り組んでいるところです。2019年３月には，第１展示室（先史・古代）をリニューアルオープンしました。また，第１展示室・第３展示室・第４展示室の特集展示室及び企画展示室等では特集展示を実施し，最新の研究成果や展示する機会の少ない資料の公開等を行っています。

構成員

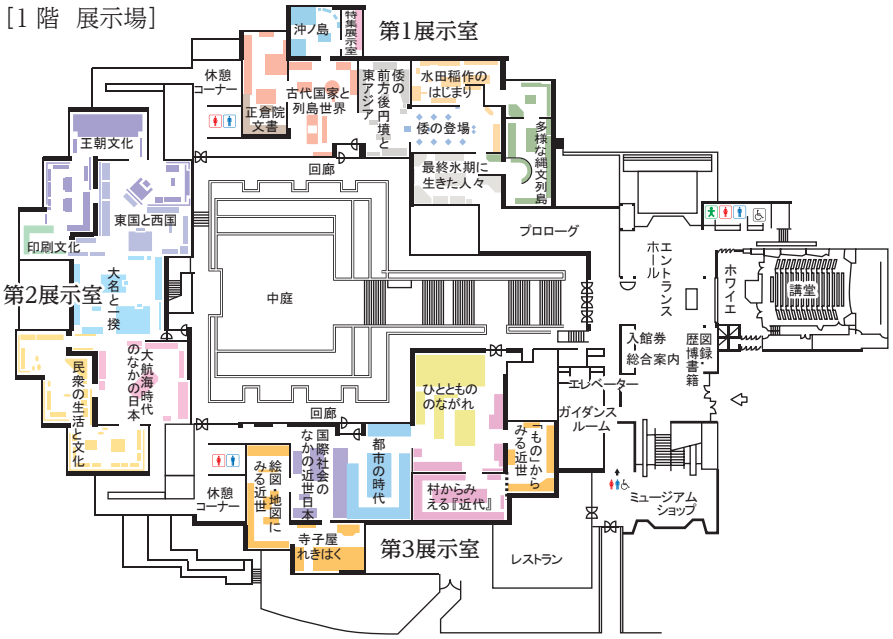
■博物館資源センター長	坂本　　稔	教授
■資料・修復担当	若木　重行	准教授
	鷲頭　　桂	准教授
■情報・知的財産担当	橋本　雄太	准教授
■展示・植物苑担当	樋口　雄彦	教授
	小瀬戸恵美	准教授

収蔵庫内の古典籍資料の収蔵状況

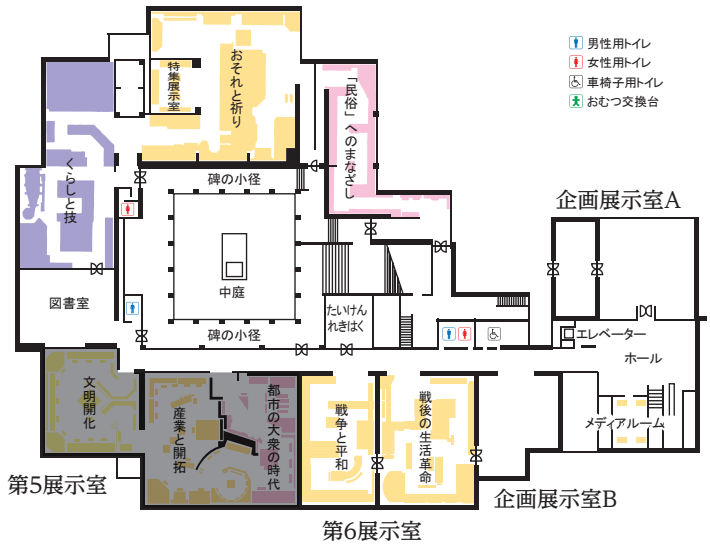
企画展示「陰陽師とは何者かーうらない，まじない，こよみをつくるー」の開催

総合展示

［1 階　展示場］



［地下階　展示場］　第4展示室



展示室配置図　　第５展示室リニューアルにつき現在閉室中，2026年３月オープン予定

常設の総合展示は，日本の歴史・文化の流れから，現代の視点で重要と考えるテーマを選び，それらの生活史に重点をおいて構成しています。

展示室の導入部分に，現代から過去へと時代をさかのぼっていくプロローグをおき，次いで第１展示室から第３展示室までは，先史・古代から中世を経て近世までを15のテーマと６つのサブテーマでほぼ時代順に配置しています。そして，第４展示室には，日本列島の民俗文化に関する３つのテーマを，第５展示室には近代の３つのテーマを，また，第６展示室には現代の２つのテーマをそれぞれ配置しています。各テーマは，それぞれ館内外の研究者によるプロジェクト研究によって，その問題に対する一つの考え方の提案を試みたものです。

実物資料はもちろん，複製資料や復元模型を積極的にとり入れ，それらを効果的に配列するとともに，グラフィックパネル，映像，タッチパネル，音声ガイドアプリなどの補助手段も使用することで，できるだけわかりやすく解説することに努めています。

プロローグ

プロローグ全体　入口付近からの見通し

入ってすぐ右手の壁に鏡を配置し，そこでまず現在の自身の姿を確認してもらいます。それから各展示室を象徴する資料や等身大の人物イメージを紹介しながら，過去へと時代をさかのぼっていき，２万５千年前の氷期の地球図へと導きます。見学者はこのタイムトンネルを通過してから第１展示室へと足を踏み入れることになります。

第1展示室

「倭の登場」展示風景

「最終氷期に生きた人々」展示風景

「多様な縄文列島」展示風景

「水田稲作のはじまり」展示風景

「倭の前方後円墳と東アジア」展示風景

「古代国家と列島世界」展示風景

特集展示「北の大地が育んだ古代ーオホーツク文化と擦文文化ー」展示風景

日本列島に人類が現れる約3万7千年前から中世の息吹が見え始める10世紀まで，日本列島上に生きた人びとのくらしと文化を，環境や東アジアの国際関係の視点から取り上げています。時代区分にとらわれない移行期を重視して組み立てた，「最終氷期に生きた人々」「多様な縄文列島」「水田稲作のはじまり」「倭の登場」「倭の前方後円墳と東アジア」「古代国家と列島世界」という6つのテーマと，世界遺産である「沖ノ島」と「正倉院文書」もあります。

また，館蔵資料を中心とした展示を行うための特集展示室もありますので，新しい研究成果を可動的に可視化していきます。

第2展示室

「東国と西国」展示風景

平安時代から安土桃山時代までの日本の文化と生活を，貴族や武士，庶民といった様々な階層の立場から探っていきます。平安時代のあでやかな王朝文化，武士が台頭した鎌倉時代の東国の様相，建築の技術に一大転機をもたらした大鋸使用の復元模型，室町時代の洛中洛外図屏風と京都の都市模型などを展示しています。

「王朝文化」,「東国と西国」,「大名と一揆」,「民衆の生活と文化」,「大航海時代のなかの日本」,「印刷文化」の6つのテーマで構成しています。

「王朝文化」王朝貴族の装束（夏の料）

「大名と一揆」京都の町並み（復元模型）

「民衆の生活と文化」大鋸使用の復元模型

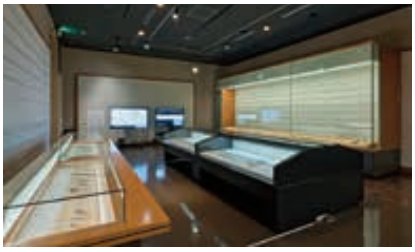
「大航海時代のなかの日本」さまざまな火縄銃

第3展示室

「国際社会のなかの近世日本」展示風景

「都市の時代」江戸橋広小路模型（部分）

「ひとともののながれ」北前船と小鵜飼舟模型


特集展示「江戸の妖怪絵巻」展示風景

特集展示「新出の野村コレクション」展示風景

江戸時代の人びとの生活や文化について，日本を取り巻く国際関係，巨大都市江戸の社会構造，江戸時代を通して拡大するひとともの流れ，村のなかから芽生えてくる近代の要素，などに注目して展示しています。

「国際社会のなかの近世日本」，「都市の時代」，「ひとともののながれ」，「村からみえる『近代』」，「寺子屋れきはく」，「絵図・地図にみる近世」，「『もの』からみる近世」で構成しています。

第3展示室特集展示　「もの」からみる近世

スクワイア家の記憶－ある英国人技術者の遺品から－

	2024年 7月23日（火）～ 10月 6日（日）
歴史・文化の中の鄭成功	2024年11月26日（火）～ 2025年1月26日（日）
和宮ゆかりの雛かざり	2025年 2月18日（火）～ 3月30日（日）

第4展示室

「おそれと祈り」展示風景

「おそれと祈り」（宇出津あばれ祭：再現）展示風景

「おそれと祈り」（葬列）展示風景

第４展示室の全体のテーマは「列島の民俗文化」で，ユーラシア大陸に寄り添うように連なる島々の上で展開する人びとの生活から生み出され，受けつがれてきた民俗文化を取りあげています。

展示は3つのゾーンから構成されます。第1は，地域開発や消費社会の影響を受けた現代社会の民俗を考える「『民俗』へのまなざし」，第2は，祭りや妖怪，まじない，さらに人生の節目となる多様な儀礼を取りあげる「おそれと祈り」，第3は，生活や行事の場である民家や，民俗の交流を担う職人・商人とその近代化，農山漁村のさまざまな生活活動を見つめる「くらしと技」です。これらによって民俗の意味を改めて考えてもらうことを目指しています。

また，館蔵資料を中心とした特集展示も開催しています。

特集展示「四国遍路・文化遺産へのみちゆき」展示風景

第4展示室特集展示

幕末の外交官－幕臣柴田剛中とその資料－

2024年４月23日（火）～７月28日（日）

第5展示室

「文明開化」展示風景

「文明開化」春米学校模型

「産業と開拓」展示風景

「都市の大衆の時代」浅草路地空間の復元

「都市の大衆の時代」同潤会アパートの復元

19世紀後半の近代の出発から1920年代までを「文明開化」,「産業と開拓」,「都市の大衆の時代」の3つのテーマで構成しています。明治政府と民間の双方が進めた文明開化や，殖産興業・富国強兵を担った製糸と製鉄をとりあげ，また，北海道開拓とアイヌの近代にも目を向けています。関東大震災の恐怖を映像展示し，女性の視点から消費生活文化をとらえ，ミニシアターでは無声映画を上映しています。

※第5展示室リニューアルにつき，2023年7月4日より閉室。

第6展示室

「戦後の生活革命」（「高度経済成長と生活の変貌」）展示風景

「戦争と平和」と「戦後の生活革命」の２つのテーマで構成され，主に1930年代から1970年代の生活と文化，それを取り巻く社会と世界の動きについて，当時の生活用具や出版物のほか，映画・CM・ニュースなどの各種映像資料，復元模型やジオラマなどを活用して展示しています。

「戦争と平和」（「占領下の生活」）闇市・露天商（実物大再現）

「戦争と平和」（「兵士の誕生」）展示風景

「戦後の生活革命」（「大衆文化から見た戦後日本のイメージ」）映画「浮雲」撮影セット「ゆき子の部屋」再現（©1955 東宝）

「戦後の生活革命」日本住宅公団の団地（実物大再現）

くらしの植物苑

くらしの植物苑は，日本の生活文化を支えてきた植物を系統的に植栽し，それらの生きた植物を通して，歴史的な植物への親しみを深めるとともに，植物という角度から歴史や民俗を捉え直すことを目的として開設されました。苑内では食べる，織る・漉く，染める，治す，道具をつくる，塗る・燃やすのテーマで植物を6つの地区に分けて展示しています。

特別企画「冬の華・サザンカ」

特別企画「伝統の桜草」
桜草（段飾り）

特別企画「伝統の朝顔」

特別企画「伝統の古典菊」

くらしの植物苑特別企画

伝統の桜草	2024年 4月 9日(火)～ 4月30日(日)
伝統の朝顔	2024年 8月 7日(水)～ 9月 8日(日)
伝統の古典菊	2024年10月29日(火)～11月24日(日)
冬の華・サザンカ	2024年11月26日(火)～2025年1月26日(日)

特別企画「伝統の朝顔」東屋での展示風景

企画展示室

企画展示『陰陽師とは何者かーうらない，まじない，こよみをつくるー』

企画展示室では，館内外の研究者による日本の歴史と文化に関する様々な共同研究プロジェクトをもとに，最新の研究成果を広く一般に公開するため年数回の企画展示・特集展示を開催しています。

今年度は2回の企画展示を開催します。

企画展示『陰陽師とは何者かーうらない，まじない，こよみをつくるー』

企画展示『歴博色尽くし』

企画展示『歴博色尽くし』

企画展示『歴博色尽くし』

企画展示

歴史の未来ー過去を伝えるひと・もの・データー	2024年10月 8日(火)～12月8日(日)
時代を映す錦絵ー浮世絵師が描いた幕末・明治ー	2025年 3月25日(火)～ 5月6日(火・休)

碑の小径（いしぶみのこみち）

日本の古代においては，東北から九州までの各地で，様々な形の石などに文字を彫り込んだ碑が造られました。これらの石碑などは，現在，失われたものを含めて，24基が知られています。「碑の小径」では，歴博が所蔵する石碑の複製品のうち，10基を中庭1階の回廊に展示しています。

入館者数

2023年度総入館者数　164,337人

	入館者数	内訳	
本館	144,825人	一般	112,603人
		高校・大学生	9,926人
		小・中学生	22,296人
くらしの植物苑	19,512人	個人	15,351人
		団体	4,161人
共催展等他会場	233,279人		

■入館者の推移

区分	本館 一般	本館 高校・大学生	本館 小・中学生	くらしの植物苑	小計	共催展等他会場	計
平成25（2013）年度	96,509	9,572	33,360	18,986	158,427	3,639	162,066
平成26（2014）年度	106,228	9,468	34,546	22,112	172,354	25,775	198,129
平成27（2015）年度	127,911	9,909	31,784	26,289	195,893	127,872	323,765
平成28（2016）年度	111,098	9,673	29,424	24,772	174,967	125,519	300,486
平成29（2017）年度	116,133	9,737	28,794	26,253	180,917	398,958	579,875
平成30（2018）年度	113,848	9,150	28,643	22,457	174,098	341,280	515,378
※平成31・令和元（2019）年度	120,772	8,799	29,199	20,665	179,435	1,001,443	1,180,878
※令和2（2020）年度	62,455	5,042	7,812	17,738	93,047	24,659	117,706
※令和3（2021）年度	71,256	5,157	13,750	21,124	111,287	123,973	235,260
令和4（2022）年度	96,508	6,989	18,148	20,966	142,611	26,990	169,601
令和5（2023）年度	112,603	9,926	22,296	19,512	164,337	233,279	397,616

※新型コロナウイルス感染症拡大防止のための本館およびくらしの植物苑の臨時休館（休苑）期間：
令和2（2020）年2月28日（金）～6月29日（月）

※冠木門工事のため，くらしの植物苑の臨時休苑期間：令和3（2021）年12月21日（火）～12月26日（日）

資料調査研究プロジェクト

歴博の資料収集方針に基づき蓄積された所蔵資料を研究に広く有効に利用できるように，目録情報や画像などの基礎データを調査・整理し，資料目録や資料図録をはじめとする多様な形態で公開することを目的とした資料調査研究プロジェクトを計画的に進めています。

（2024年5月1日現在）

No.	研究課題	研究代表者	所属・職名
1	棟梁鈴木家資料	工藤　航平	研究部・歴史研究系　准教授
2	縄文時代資料	中村　耕作	研究部・考古研究系　准教授

資料の利用

所蔵資料は，他の博物館で開催される展示への資料貸出や，館外研究者による資料調査・大学のゼミなどの授業での活用として，館内での熟覧および即日閲覧等で利用されています。歴博が制作した映像資料や所蔵資料の写真画像データ等も貸出を行い，研究者等の研究活動に貢献しています。

新収蔵資料
月に浪兎漆絵盆（新海洸漆絵コレクション）

新収蔵資料
鯰絵「地震よけの歌」版木（歌川派錦絵版木）

年度＼区分	資料の貸出	熟覧・撮影	即日閲覧	写真画像の貸出	映像資料の貸出
平成31・令和元（2019）年度	53件 （資料523点）	67件 （資料1,037点）	90件 （資料313点）	653件 （資料11,272点）	20件 （資料22点）
令和2（2020）年度	39件 （資料276点）	54件 （資料1,491点）	57件 （資料301点）	614件 （資料47,141点）	17件 （資料20点）
令和3（2021）年度	20件 （資料154点）	35件 （資料403点）	81件 （資料323点）	521件 （資料4,284点）	27件 （資料30点）
令和4（2022）年度	34件 （資料183点）	67件 （資料2,511点）	60件 （資料142点）	539件 （資料2,801点）	27件 （資料29点）
令和5（2023）年度	38件 （資料381点）	95件 （資料4,859点）	62件 （資料128点）	562件 （資料1,863点）	33件 （資料36点）

資料・図書・データベース

■資料収蔵点数

（2024年5月1日現在）

区分		点数
収蔵資料		271,685点
	国宝	5点
	重要文化財	87点
	重要美術品	27点
映像資料		5,920点
計		277,605点

■蔵書冊数

（2024年5月1日現在）

図書	372,378冊
雑誌	6,807誌

■総合資料学情報基盤khirin

データベース名	公開日	収録件数
歴民カード歴史・公開用	平成30（2018）年3月	17,164件
歴民カード考古・公開用	平成30（2018）年3月	10,188件
館蔵資料目録（khirin版）	平成30（2018）年3月	286,222件
聆涛閣集古帖	平成30（2018）年5月	1,745件
千葉大学附属図書館所蔵町野家文書	平成30（2018）年9月	837件
館蔵錦絵	平成31（2019）年3月	2,029件
鳴門教育大学附属図書館所蔵後藤家文書	令和元（2019）年6月	5,407件
館蔵宋版「史記」	令和2（2020）年4月	90件
岩手県奥州市所有民具	令和3（2021）年2月	830件
中世日本の東アジア交流史に関する史料の集成的研究（科研費）	令和3（2021）年5月	15,741件
館蔵土御門家本延喜式	令和3（2021）年8月	50件
山形県上山市立図書館所蔵山田家文書	令和4（2022）年1月	1,929件
歴博所蔵漢籍および中国経典類	令和4（2022）年4月	328件
岩手県奥州市所蔵椎名家資料	令和5（2023）年3月	26件
山形県上山市立図書館所蔵増戸文庫	令和5（2023）年4月	685件
上平村伝統文化総合保存伝承事業民俗資料カード	令和5（2023）年5月	977件

■記録類全文データベース

データベース名	公開日	収録件数
玉葉	平成6（1994）年12月	7,463件
吾妻鏡	平成6（1994）年12月	6,684件
左経記	平成6（1994）年12月	1,989件
天文日記	平成6（1994）年12月	4,171件
兼顕卿記	平成6（1994）年12月	684件
大乗院寺社雑事記	平成10（1998）年12月	59,609件
兵範記	平成16（2004）年3月	2,631件
山槐記	平成16（2004）年3月	2,193件
渋沢栄一滞仏日記	平成24（2012）年3月	928件
春記	平成28（2016）年3月	1,484件

■データベースれきはく一覧

（https://www.rekihaku.ac.jp/database/）

データベース名	公開日	収録件数
旧高旧領取調帳	平成2（1990）年4月	97,359件
歴博図書目録	平成3（1991）年4月	338,920件
東大寺文書目録	平成4（1992）年10月	12,099件
日本荘園	平成5（1993）年12月	9,116件
荘園関係文献目録	平成6（1993）年12月	7,284件
陶磁器出土遺跡	平成7（1994）年12月	7,992件
土偶	平成7（1995）年3月	10,641件
館蔵資料	平成8（1996）年10月	327,953件
館蔵中世古文書	平成10（1998）年8月	2,340件
近世窯業遺跡	平成11（1999）年1月	1,317件
近世窯業関係主要文献目録	平成11（1999）年1月	1,904件
日本民俗学文献目録	平成11（1999）年4月	64,962件
城館城下発掘	平成11（1999）年4月	3,348件
弥生石器遺跡	平成12（2000）年7月	3,459件
自由民権運動研究文献目録	平成14（2002）年3月	5,333件
棟札	平成15（2003）年7月	1,060件
古代−中世都市生活史（物価）	平成16（2004）年7月	37,253件
館蔵近世・近代古文書	平成17（2005）年3月	8,002件
館蔵紀州徳川家伝来楽器	平成17（2005）年3月	214件
館蔵武器武具	平成17（2005）年3月	4,024件
館蔵錦絵	平成17（2005）年7月	2,340件
地域蘭学者門人帳人名	平成18（2006）年3月	9,262件
江戸商人・職人	平成18（2006）年3月	42,073件
中世制札	平成18（2006）年12月	203件
館蔵『懐溜諸屑』	平成19（2007）年3月	3,515件
日本民謡	平成19（2007）年3月	63,020件
館蔵染色用型紙	平成19（2007）年4月	100件
館蔵野村正治郎衣裳コレクション	平成19（2007）年4月	111件
館蔵縄文時代遺物	平成20（2008）年1月	7,263件
館蔵装身具	平成20（2008）年3月	360件
中世地方都市	平成20（2008）年3月	1,713件
東国板碑	平成20（2008）年3月	65,757件
館蔵高松宮家伝来禁裏本	平成21（2009）年3月	1,981件
俗信	平成22（2010）年3月	48,005件
民俗語彙	平成22（2010）年3月	35,237件
縄文・弥生集落遺跡	平成23（2011）年3月	25,544件
文化財材料知識	平成23（2011）年3月	1,546件
日本の遺跡出土大型植物遺体	平成28（2016）年3月	62,951件
シーボルト父子関係資料	平成28（2016）年3月	13,735件
日系アメリカ移民	平成28（2016）年3月	410件
洛中洛外図屏風「歴博甲本」	平成29（2017）年1月	1,426件
洛中洛外図屏風「歴博乙本」	平成29（2017）年1月	1,172件
近世職人画像	平成29（2017）年3月	2,885件
遺跡発掘調査報告書放射性炭素年代測定	平成30（2018）年1月	44,425件
延喜式関係論文目録	平成31（2019）年3月	114,658件

広報連携センター

広報機能を一元的に担うとともに，館外と歴博における諸活動との連携を図るために，設置された組織です。広報・出版とレファレンスの機能を強化・拡充するとともに，広く社会や大学等の機関と連携して博物館の共同利用を促進することを目的としています。

具体的な事業としては，ポスターその他による企画展示やフォーラムの広報拡充，ホームページなどによる共同研究成果の情報提供，各種事業に関するプレスリリースの強化，大学の講義などで歴博が利用されることの活性化，歴博フォーラムや歴博講演会の企画・開催，れきはくこどもワークシートのほか自由研究相談室などの夏休み行事の開催，くらしの植物苑観察会の実施，文化庁との共催による歴史民俗資料館等専門職員研修会の実施，委員会設置による歴史と文化への好奇心をひらく『REKIHAKU』の編集・刊行,『年報』の編集・刊行，各種歴博刊行物の管理・配布をはじめ，小中学生など学校団体の授業への協力などがあります。

構成員

■広報連携センター長　鈴木　卓治　教授
■広報担当　川村　清志　准教授
　天野　真志　准教授
■博物館活用担当　澤田　和人　准教授
　松田　睦彦　准教授
　吉村　郊子　助教

企画展示「陰陽師とは何者かーうらない，まじない，こよみをつくるー」ポスター

企画展示「歴博色尽くし」ポスター

夏休みファミリープログラム
「れきはくをかこうよ」

くらしの植物苑観察会

広報・普及

歴博講演会

歴博は，日本の歴史や文化を研究する大学共同利用機関として，全国の研究者が共同利用するとともに，その研究成果を広く一般の人々にも公開する目的で展示を行っています。

さらに，フォーラム・講演会・くらしの植物苑観察会等の普及活動，研究者および一般の人々を対象とした出版物等による広報活動も行っています。また，児童・生徒向けプログラムとして，れきはくこどもワークシート，夏休みの自由研究相談室等を開催しています。

■歴博フォーラム開催実績（2023年度）

日時		講師		テーマ
第115回	令和5（2023）年 4月 1日（土）	研究部	三上　喜孝　他	いにしえの「玉手箱」，近世好古図録をひらく
第116回	令和5（2023）年 4月15日（土）	学習院大学文学部史学科　教授	家永　遵嗣　他	中世公家の〈公務〉と生活－広橋家記録の世界－
第117回	令和5（2023）年10月 7日（土）	研究部　民俗研究系	小池　淳一　他	陰陽師と暦

■歴博映像フォーラム開催実績（2023年度）

日時		講師		テーマ
第17回	令和6（2024）年 1月20日（土）	研究部　民俗研究系 客員准教授	内田　順子 春日　　聡　他	地域文化の再構築における映像の活用

■歴博講演会開催実績（2023年度）

日時		講師		テーマ
第444回	令和5（2023）年 7月 8日（土）	研究部　考古研究系	中村　耕作	顔・身体をもった縄文土器
第445回	令和5（2023）年 8月12日（土）	研究部　情報資料研究系	大久保純一	絵画史から見た江戸の妖怪絵巻
第446回	令和5（2023）年 9月 9日（土）	研究部　情報資料研究系	箱崎　真隆	推定不能－樹木に刻まれた太陽巨大爆発の謎－
第447回	令和5（2023）年11月11日（土）	研究部　民俗研究系	小池　淳一	陰陽道と伝承文化
第448回	令和5（2023）年12月 9日（土）	東京大学大学院 人文社会系研究科　教授	熊木　俊朗	オホーツク文化とは何か －東京大学文学部と北海文化研究－
第449回	令和6（2024）年 1月13日（土）	研究部　歴史研究系	工藤　航平	知を編む人びと－江戸時代の蔵書文化－
第450回	令和6（2024）年 2月10日（土）	研究部　特任助教	アルト　ヨアヒム	歴史ではなく，記憶：日本アニメが作る 第二次世界大戦のイメージ
第451回	令和6（2024）年 3月 9日（土）	研究部　考古研究系	藤尾慎一郎	土器・鉄・年代・DNA

社会連携

産業界との連携事業

■日本郵便株式会社との連携

日本郵便株式会社のグリーティング切手「夏のグリーティング」の発行に関して，学術指導制度により，植物苑の「変化朝顔」から題材の選定や画像データの提供を行い，職員によるデザインの考証・監修等を実施しました。

■成田空港活用協議会との連携

新たな社会連携の取組として，成田空港活用協議会に参画し，日本文化の発信によるターミナル空間の価値向上および近隣エリアへの誘客を目的とした特別展示「光る江戸図で感じる日本」を実施しています(2020年3月～)。

成田国際空港における「光る江戸図」展示風景

■株式会社山川出版社との共同研究

展示資料を使った教材を開発することで，学校における歴史教育での活用を促進し，歴博展示の教育普及への一助としています。

■災害時の車両避難場所の提供

佐倉市との協定により，近隣の河川氾濫に際し，市内のバス会社等の車両を高台にある歴博の大型駐車場に避難させることで，地域交通の足となるバス等を浸水被害から守る事業に協力し，毎年佐倉市・バス会社と車両避難訓練を実施しています。

歴史民俗系博物館ネットワークの構築（全国歴史民俗系博物館協議会）

東日本大震災における歴史・民俗資料の救援の遅れから，歴史・民俗系博物館の連絡組織を作る必要性が叫ばれるようになり，全国12博物館の館長が発起人となって，2012年に全国の歴史・民俗系博物館651館による「全国歴史民俗系博物館協議会」(歴民協)が発足しました(2024年3月末現在：821館)。歴博は，幹事館・事務局館として歴民協の運営に携わっています。

歴史民俗資料館等専門職員研修会

歴史民俗資料館等の活動の充実に資するため，文化庁と共催で，全国の歴史民俗資料館等において，歴史資料・考古資料・民俗資料等の保存活用を担当する者に対し，これら文化財の調査，収集，保存および公開等に関する必要な専門知識と技能の研修を行っています。

年度	参加者数	参加者所属機関数
平成30（2018）年度	51	51
平成31・令和元（2019）年度	53	51
令和2（2020）年度	新型コロナウイルス感染症拡大防止のため延期	
令和3（2021）年度	49	48
令和4（2022）年度	31	31
令和5（2023）年度	28	28

研修受講会場の様子

博学連携事業（先生のための歴博活用講座）

小学校・中学校・高等学校・特別支援学校の教員を対象に，歴博の展示や展示資料の理解を深めるとともに，それらを活用した授業の方法について事例を紹介するなど，学校教育における博物館利用の推進を図ることを目的としています。内容は，展示の解説，学校対応・教育教材の紹介，参加者相互による授業プラン作り，意見交換などを行っています。

年度	参加者数	参加者所属機関数
平成30（2018）年度	28	23
平成31・令和元（2019）年度	10	10
令和2（2020）年度	新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止	
令和3（2021）年度	新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止	
令和4（2022）年度	5	5
令和5（2023）年度	28	28

博学連携フォーラムの様子

大学・大学院への貢献・利用

歴博は，日本国内だけではなく日本学専攻等を有する海外の多くの大学とも連携協定を結んでいます。歴博の知と研究の集積を，大学共同利用機関として，いかにして国内外の大学等の利用に供するか，また人材育成にどのような貢献ができるのか，その仕組み作りと実践に取り組んでいます。

■1．可搬型展示ユニット

可搬型展示ユニットは，屏風型で（総重量15キロ程度）折りたたみが可能であり，運搬が簡便で，複数の展示ユニットを連結し，様々な展示コンテンツを活用して多彩な展示を展開できます。博物館の展示室でなくても，大学の教室や空港のロビー，行政機関のホールや会議室でも展示可能であるという特徴を持っています。これを展示や授業に活用してもらい，アクティブラーニングにつなげていくことを目的としています。

神奈川大学での可搬型展示ユニットの展示風景

■2．「国立歴史民俗博物館未来世代育成プログラム」

歴博と教育連携にかかる協定を締結した大学から院生・学生が集い，集中講義形式で学ぶプログラムです。歴博の共同研究や研究者の知の蓄積を，歴博の展示や資料を活用しながら次世代に還元するとともに，集中講義を通して全国の，また国内外の人文系学生をつなげることもねらいとしています。

■3．インターンシップ

歴博では，インターンシップとして大学生の受け入れを行っています。ファミリープログラムでの対応等博物館業務の体験を通じて，職業適性の見極めを支援し，高い職業意識を育成するとともに，歴史学・考古学・民俗学および関連諸科学に関係する研究に理解を深めてもらうことを目的としています。

研究者受入・大学院教育協力等

歴博は大学共同利用機関として，国内外研究機関からの研究者の受入れを行っています。また，大学院教育の一環として，特別共同利用研究員制度を設けており，大学の要請に応じ歴史学・考古学・民俗学およびそれに関連する分野の大学院生を受け入れ，必要な指導を行っています。

千葉大学とは，連携・協力に関する協定（覚書）に基づき，博物館の研究資料・施設等を活用した連携大学院方式での博士課程（後期）の授業を実施し，展示と資料を活用した文理融合による大学院生の研究指導を行っています。

歴博では，『大学のための歴博利用ガイド　歴博でアクティブ・ラーニング』を作成して大学等へ配布し，大学の講義等における博物館活用の促進を図っています。

大学のための歴博利用ガイド

■研究者受入数

年度	特別共同利用研究員	外来研究員
平成23（2011）年度	3	12
平成24（2012）年度	7	12
平成25（2013）年度	4	12
平成26（2014）年度	3	7
平成27（2015）年度	2	6
平成28（2016）年度	3	3
平成29（2017）年度	3	4
平成30（2018）年度	5	6
平成31・令和元（2019）年度	4	4
令和2（2020）年度	1	1
令和3（2021）年度	2	1
令和4（2022）年度	2	2
令和5（2023）年度	4	3
令和6（2024）年度	4	3

総合研究大学院大学 先端学術院先端学術専攻日本歴史研究コース

総合研究大学院大学は，各地にある大学共同利用機関を活用し，幅広い視野を持った国際的で豊かな発想をもつ研究者の養成と従来の学問分野の枠を越えた独創的学術研究の開拓・推進を目指して，1988年に創設された我が国最初の大学院大学です。その専攻の一つである文化科学研究科日本歴史研究専攻は，国立歴史民俗博物館を基盤機関とし，後期3年の博士課程の大学院として，1999年に設置されました。2023年度から，総合研究大学院大学の各研究科・専攻は先端学術院先端学術専攻という一つの教育組織へと統合され，本専攻はその中の「日本歴史研究コース」になりました。

本コースの目的は，広く歴史学・考古学・民俗学や自然科学を含む関連諸科学の協業による総合的な日本歴史の解明を目指した教育・研究を行うことであり，文献史料・考古資料・民俗資料などの各種の資料について，これまでの資料学の蓄積を踏まえ，自然科学的な方法をも取り入れた多角的な新しい資料研究法の基礎のうえに立ち，日本列島に展開した歴史と文化に関する斬新なテーマを学際的かつ世界史的な広い視野からアプローチしうる能力と柔軟な研究姿勢をもつ研究者を育成することです。本コースの大学院教育の特徴は，共同研究を推進する大学共同利用機関を基盤機関としており，歴史学・考古学・民俗学・関連諸科学などの日本の歴史と文化の研究を専門とする研究者が多数在籍していることから，実地調査を含む多様な視点での学際的な研究指導が受けられること，また，博物館を基盤機関としていることから，貴重な実物資料や多様な情報資料を直接活用できること，さらにX線分析や年代測定などの高度な分析機器を利用した研究指導も実施している点にあります。

このように本コースの教育・研究は，学際的な新しい歴史学を開拓し，学問そのものの進歩に寄与するものです。

■1．学生数（入学定員3名）

（2024年5月1日現在）

1年次	2年次	3年次	計
1	1	10	12

■2．入学者状況

年度	志願者	合格者	入学者
平成27（2015）年度	4	2	2
平成28（2016）年度	4	1	1
平成29（2017）年度	5	2	2
平成30（2018）年度	7	3	2
平成31・令和元（2019）年度	6	2	2
令和2（2020）年度	6	1	1
令和3（2021）年度	5	4	4
令和4（2022）年度	2	1	1
令和5（2023）年度	4	1	1
令和6（2024）年度	4	1	1

■3．学位取得者状況

年度	取得者
平成27（2015）年度	1
平成28（2016）年度	1
平成29（2017）年度	2
平成30（2018）年度	0
平成31・令和元（2019）年度	3
令和2（2020）年度	2
令和3（2021）年度	0
令和4（2022）年度	1
令和5（2023）年度	1

総合研究大学院大学

専攻	コース	基盤機関	大学共同利用機関等法人
先端学術院先端学術専攻	人類文化研究コース	国立民族学博物館	人間文化研究機構
	国際日本研究コース	国際日本文化研究センター	
	日本歴史研究コース	国立歴史民俗博物館	
	日本文学研究コース	国文学研究資料館	
	日本語言語科学コース	国立国語研究所	
	総合地球環境学コース	総合地球環境学研究所	
	⋮		⋮

公開講演会風景

大学院説明会の様子

■2024年度　日本歷史研究コース授業科目・担当教員一覧

教育研究指導分野		授業科目	授業科目の標題	担当職名	氏名
資料研究系	歴史資料研究	歴史研究の素材としての資料の研究			
		古代資料研究	古代文献史料論	教　授	小倉　慈司
		中世資料研究	（2024年度は開講しません）		
		近世資料研究	近世文献資料・地域歴史資料論	准教授	天野　真志
		近現代資料研究	近現代資料の収集・整理・活用	教　授	樋口　雄彦
		金石文・出土文字資料研究	古代金石文・出土文字資料の特質と活用法の研究	教　授	仁藤　敦史
		考古資料研究	考古学資料論	教　授	林部　均
		民俗誌研究	伝統産業と商家に関する研究	准教授	青木　隆浩
	資料論・展示研究	資料自体の特性の研究とそれを用いた歴史表象の研究			
		物質文化資料論	表象をめぐる物質文化研究	教　授	山田　慎也
		民俗文化資料論	民俗の伝承に関する資料論的研究	教　授	関沢まゆみ
		画像資料論	古代荘園図研究	教　授	三上　喜孝
		美術工芸資料論	美術史的観点による画像資料の活用法の研究	教　授	大久保純一
		歴史展示研究	近現代史展示論	准教授	佐川　享平
	分析・情報科学	物質としての資料の分析と資料情報のデータ化の研究			
		分析調査論	自然科学分析の歴史資料への適用	教　授	齋藤　努
		年代資料論	年代測定の歴史学・考古学への応用研究	教　授	坂本　稔
		資料保存科学	資料の予防的保存の研究	准教授	小瀬戸恵美
		歴史情報科学	日本歴史学の研究・展示に資するデジタル技術	教　授	鈴木　卓治
	総合資料学	歴史学・情報学・自然科学などが融合した総合的な資料研究			
		総合資料学	歴史資料に関する異分野融合型研究	准教授	後藤　真
社会史研究系	社会論	各時代における社会構造の特質についての研究			
		古代社会論	日本先史社会の研究	教　授	松木　武彦
		中世社会論	（2024年度は開講しません）		
		近世社会論	地域文化と民衆文化	准教授	工藤　航平
		近現代社会論	戦時戦後日本の地域社会史と民衆運動・文化運動	教　授	大串　潤児
	技術史・環境史	生業・技術・自然との関わりなどについての研究			
		古代技術史	出土資料からみた先史・古代の技術	准教授	中村　耕作
		中世技術史	出土資料からみた中世の生産技術	准教授	村木　二郎
		近世技術史	近世染織資料の技術分析	准教授	澤田　和人
		生態環境史	近現代における人と自然のかかわりの変遷	准教授	松田　睦彦
		民俗環境論	（2024年度は開講しません）		
	地域文化論	さまざまな伝承や意識を素材とした研究			
		村落伝承論	歳時記・季寄せの民俗学的研究	教　授	小池　淳一
		都市伝承論	物語とメディアからみた「都市」の民俗文化	准教授	川村　清志
		信仰伝承論	民俗宗教・民間信仰と外来文化	教　授	松尾　恒一
		映像記録論	学術映像についての理論的・実践的研究	教　授	内田　順子
	国際交流論	国際的な文化交流，政治交渉史に関する研究			
		日欧物質文化交流論	16～19世紀の日欧物質文化交流	教　授	日高　薫
		日欧政治交渉論	日本と欧米の外交関係に関する研究	准教授	福岡万里子
		アジア政治交渉論	考古学からみた先史・古代の日朝関係史	教　授	高田　貫太
		アジア物質文化交流論	東アジア出土資料の比較研究	准教授	上野　祥史
	基礎演習Ⅲ（1年生対象）		院生による研究発表	全教員	
	基礎演習Ⅳ（2年生対象）				
	先端学術院特別研究ⅢA・ⅢB		論文作成のための講義，演習，実習等	指導教員等	
	先端学術院特別研究ⅣA・ⅣB				
	先端学術院特別研究ⅤA・ⅤB				
	資料の調査と活用		集中講義	教　授 教　授 教　授 教　授 准教授 准教授	坂本　稔 日高　薫 小倉　慈司 三上　喜孝 川村　清志 上野　祥史
	地域研究の方法		集中講義	教　授 准教授 准教授	小池　淳一 村木　二郎 松田　睦彦
	博物館コミュニケーション論		（2024年度は開講しません）		
	総合資料学		集中講義	准教授	後藤　真 他

国際学術研究交流

国際企画室

国際企画室は，2014年3月に設置された国際交流室を前身として，本館の国際戦略を策定し国際交流体制および国際発信力を強化するとともに，学術交流協定等に基づく共同研究等を推進することを目的として2016年4月に発足しました。

室長の下に研究推進担当・博物館資源担当・広報連携担当を置き，本館各センターとの効果的な連携を図るとともに，特に学術交流を強化すべき重点地域については，その地域の言語・文化に精通する室員を確保することで，国際戦略に基づく機動的な実務を遂行しています。

インドネシアバンドン工科大学の歴博表敬訪問の様子

韓国国立農業博物館との学術交流協定調印式の様子

■構成員

国際企画室長	山田　慎也	副館長
研究推進担当	島津　美子	准教授
博物館資源担当	小瀬戸恵美	准教授
広報連携担当	吉村　郊子	助教

■国際交流協定締結機関一覧

（2024年5月1日現在）

	国・地域	名称	協定締結年・月
1	アメリカ	スミソニアン研究機構	平成元（1989）年1月
2	韓国	国立中央博物館	平成18（2006）年4月
3	韓国	財団法人東亜細亜文化財研究院	平成21（2009）年5月
4	韓国	国立釜山大学校博物館	平成22（2010）年8月
5	台湾	国立台北芸術大学	平成25（2013）年10月
6	韓国	財団法人大韓文化財研究院	平成26（2014）年3月
7	台湾	国立台湾歴史博物館	平成26（2014）年7月
8	アメリカ	産業歴史博物館	平成28（2016）年3月
9	アメリカ	ウィングルークミュージアム	平成28（2016）年3月
10	韓国	国立ハングル博物館	平成28（2016）年11月
11	イギリス	グラスゴー博物館機構	平成29（2017）年3月
12	フィンランド	東フィンランド大学科学森林学部	平成30（2018）年8月
13	ベルギー	ルーヴェン・カトリック大学文学部	平成31（2019）年2月
14	台湾	国立成功大学	令和元（2019）年8月
15	アメリカ	ハワイタイムスフォトアーカイブファンデーション	令和元（2019）年10月
16	ドイツ	ボーフム・ルール大学	令和元（2019）年11月
17	韓国	国立慶北大学校人文学術院	令和元（2019）年12月
18	アメリカ	アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター	令和2（2020）年2月
19	ハンガリー	エトヴェシュ・ロラーンド大学人文学研究科	令和2（2020）年5月
20	イギリス	セインズベリー日本藝術研究所	令和2（2020）年5月
21	インドネシア	バンドン工科大学	令和2（2020）年8月
22	スイス	チューリヒ大学美術史研究所東アジア美術学科	令和3（2021）年10月
23	イギリス	ウェールズ国立博物館	令和4（2022）年1月
24	イギリス	ダラム大学	令和4（2022）年1月
25	イギリス	ナショナルトラスト・スコットランド	令和4（2022）年3月
26	イギリス	ケンブリッジ大学アジア中東学部	令和4（2022）年7月
27	韓国	国立民俗博物館	令和4（2022）年12月
28	イギリス	スコットランド国立博物館	令和5（2023）年1月
29	韓国	国立農業博物館	令和5（2023）年12月

海外との研究者等交流

歴博の共同研究や科学研究費補助金による研究，また，交流協定締結機関との連携強化，博物館展示等のため，外国研究機関と相互に人員を派遣しています。

国立台湾歴史博物館（台湾）との「鄭成功」をめぐる国際共同研究会

SBGアートギャラリー（レバノン）招へい研究者との資料保全に関する研究交流

■1．本館教職員の海外調査・研修等

区分	平成31・令和元（2019）年度	令和2（2020）年度	令和3（2021）年度	令和4（2022）年度	令和5（2023）年度
人数	128	0	0	54	80
行先国及び地域	韓国 55 台湾 19 アメリカ 13 その他 41			韓国 15 アメリカ 13 台湾 7 その他 19	韓国 26 台湾 14 ベルギー 9 その他 31

※1回の調査で複数の国を訪問した場合，1国につき1人として集計

■2．海外からの研究者受入

区分	平成31・令和元（2019）年度	令和2（2020）年度	令和3（2021）年度	令和4（2022）年度	令和5（2023）年度
外国人研究員	1	1	1	0	0
招へい外国人研究者	3	0	0	3	3
外国人外来研究者	0	0	0	0	0
調査等のための招へい	63	0	0	12	18
国及び地域	韓国 42 ベルギー 7 アメリカ 6 その他 12	韓国 1	韓国 1	韓国 14 イギリス 1	ベルギー 9 韓国 7 レバノン 1 その他 4

■3．主な国際交流協定締結機関との事業内容

協定締結機関名（国名）	国際交流事業内容
国立台湾歴史博物館（台湾）	日本と台湾からみた地域歴史像の解明
ダラム大学東洋博物館（イギリス）	北部イングランド所在日本資料の調査研究と活用支援
国立慶北大学校人文学術院（韓国）	東アジア記録文化の源流と知的ネットワーク研究
釜山大学校博物館（韓国）	国立歴史民俗博物館と釜山大学校博物館における研究者交流と展示協力
国立中央博物館（韓国）	先史～中世における日韓葬送儀礼の比較研究Ⅳ
国立民俗博物館（韓国）	日韓共同による民俗研究の新構築

国内学術研究交流

大学連携推進室

大学連携推進室は，歴博が大学共同利用機関として，組織的な共同研究や，展示・資料・研究装置等の共同利用等により，大学等との組織的な連携強化を推進するための体制を整備する目的で，2017年４月に発足しました。

歴博と大学等との協定に関する戦略および長期的な計画を策定するとともに，協定を締結した大学等と研究教育活動の一層の充実を図っています。

■協定締結一覧

（2024年５月１日現在）

	協定名	協定締結年・月
1	国立歴史民俗博物館と千葉県立中央博物館との博物館活動に関する協定	（平成23(2011)年３月）
2	国立大学法人千葉大学国際教育センターと国立歴史民俗博物館広報連携センターとの連携に関する協定	（平成24(2012)年10月）
3	国立歴史民俗博物館と佐倉市との連携・協力に関する協定	（平成28(2016)年２月）
4	国立歴史民俗博物館と国立大学法人神戸大学大学院人文学研究科との学術交流に関する協定	（平成28(2016)年４月）
5	国立歴史民俗博物館と東京医療保健大学との学術交流・協力に関する基本協定	（平成28(2016)年４月）
6	国立歴史民俗博物館と東京都江戸東京博物館との学術交流・協力に関する基本協定	（平成28(2016)年６月）
7	国立歴史民俗博物館と法政大学国際日本学研究所との学術交流・協力に関する基本協定	（平成28(2016)年７月）
8	国立歴史民俗博物館と国立大学法人千葉大学との包括的な連携・協力に関する協定	（平成28(2016)年10月）
9	国立歴史民俗博物館と国立大学法人東京大学史料編纂所との学術交流・協力に関する基本協定	（平成28(2016)年11月）
10	国立歴史民俗博物館と国立大学法人佐賀大学地域学歴史文化研究センターとの連携・協力に関する協定	（平成28(2016)年11月）
11	東北大学災害科学国際研究所，神戸大学大学院人文学研究科及び国立歴史民俗博物館の連携・協力に関する協定	（平成29(2017)年６月）
12	国立大学法人長崎大学と国立歴史民俗博物館との包括連携に関する協定	（平成29(2017)年12月）
13	独立行政法人国立科学博物館と国立歴史民俗博物館との包括連携に関する基本協定	（平成30(2018)年２月）
14	国立大学法人鳴門教育大学と国立歴史民俗博物館との包括連携に関する協定	（平成30(2018)年３月）
15	国立大学法人山形大学附属博物館と国立歴史民俗博物館との包括連携に関する協定	（平成30(2018)年３月）
16	国立歴史民俗博物館と国立大学法人山口大学との包括連携に関する基本協定	（平成30(2018)年４月）
17	豊橋技術科学大学情報・知能工学専攻と東フィンランド大学科学森林学部及び国立歴史民俗博物館との間における協定	（平成30(2018)年８月）
18	国立歴史民俗博物館と国立大学法人福島大学との連携・協力に関する協定	（平成30(2018)年９月）
19	国立歴史民俗博物館と国立大学法人熊本大学永青文庫研究センターとの連携・協力に関する協定	（平成31(2019)年３月）
20	国立大学法人東京大学と国立歴史民俗博物館における教育研究の連携・協力に関する協定	（平成31(2019)年３月）
21	国立歴史民俗博物館と合同会社AMANEとの包括的な連携・協力に関する協定	（令和元(2019)年７月）
22	国立歴史民俗博物館と学校法人國學院大學との包括的な連携・協力に関する協定	（令和元(2019)年７月）
23	青森県と国立歴史民俗博物館との収集資料及びデータベース等に係る連携・協力に関する協定	（令和元(2019)年12月）
24	国立歴史民俗博物館と国立大学法人岡山大学との連携・協力に関する協定	（令和２(2020)年２月）
25	国立大学法人神戸大学大学院人文学研究科，国立歴史民俗博物館，エトヴェシュ・ロラーンド大学人文学研究科，セインズベリー日本藝術研究所との共同研究ネットワークに関する協定	（令和２(2020)年５月）
26	国立歴史民俗博物館，国立大学法人宇都宮大学及び学校法人國學院大學栃木学園國學院大學栃木短期大学との包括的な連携・協力に関する協定	（令和３(2021)年３月）
27	国立大学法人筑波大学と国立歴史民俗博物館における教育研究の連携・協力に関する協定	（令和３(2021)年３月）
28	国立歴史民俗博物館と東海大学静岡キャンパスとの学術交流・協力に関する基本協定	（令和４(2022)年４月）
29	国立歴史民俗博物館と気仙沼市との連携・協力に関する協定	（令和４(2022)年８月）
30	国立歴史民俗博物館と珠洲市の連携協力に関する協定	（令和５(2023)年６月）
31	国立歴史民俗博物館と千葉県との包括連携協定	（令和６(2024)年４月）

千葉県との包括連携協定

東京大学大学院人文社会系研究科・文学部の博物館実習への協力

予算

■館内予算（2024年度）

収入	（千円）
運営費交付金	1,848,095
自己収入	56,108
入場料収入	40,556
その他の自己収入	15,552
合計	1,904,203

支出	（千円）
業務費	1,904,203
人件費	1,007,182
物件費	897,021
合計	1,904,203

※外部資金を除く。

外部資金等

■科学研究費補助金（2023年度）

採択件数および交付金決定額

（予算額単位：千円）

研究種目 ＼ 年度		令和2（2020）年度		令和3（2021）年度		令和4（2022）年度		令和5（2023）年度		令和6（2024）年度 5月1日現在	
		件数	予算額	件数	予算額	件数	予算額	件数	予算額	件数	予算額
	新学術領域研究	2	20,800	2	20,410	2	17,400	1	7,900		
科学研究費	基盤研究（A）	5	53,170	3	26,650	3	20,800	3	19,300	3	19,300
科学研究費	基盤研究（B）	9	35,880	7	24,050	7	22,500	5	17,900	9	30,400
科学研究費	基盤研究（C）	7	7,410	10	15,470	12	10,747	12	8,500	8	6,900
科学研究費	若手研究	3	2,470	2	1,040	3	3,600	3	2,400	2	1,000
科学研究費	挑戦的研究（萌芽）					3	2,800	3	3,600	1	1,200
科学研究費	研究活動スタート支援					2	2,200	2	2,000	1	900
科学研究費	特別研究員奨励費	1	780	1	780	1	604	2	2,000	1	1,000
科学研究費	学術変革領域（A）					1	3,000	1	17,600	1	17,600
	学術変革領域（A）（公募研究）									2	6,400
	研究成果公開促進費（学術図書）									2	3,500
合計		27	120,510	25	88,400	34	83,651	32	81,200	30	88,200

■受託研究（2023年度）

研究課題	研究費（千円）
冠婚葬祭と情報化に関する研究	910
冠婚葬祭と情報化に関する研究	390
出土文字資料の集成的研究	500

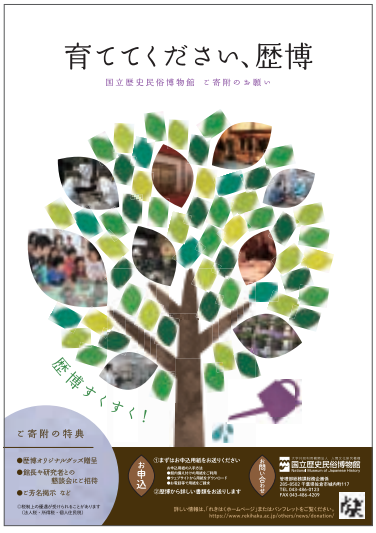
■企業との共同研究（2023年度）

研究課題	研究費（千円）
展示資料を使った教材開発研究	22

■寄附金（2023年度）

自己収入増のため，産学官連携推進室を中心に寄附金の獲得事業を行い，個人を中心とした新たな支援者を獲得し，16件の寄附金を受入れました。

目的	件数	金額（千円）
国立歴史民俗博物館が行う博物館活動の援助	1件	1,000
国立歴史民俗博物館の活動全般のため	11件	676
正倉院文書複製製作事業のため	2件	110
人間文化研究機構基金	2件	22
合計	16件	1,808



出版活動

1.『国立歴史民俗博物館研究報告』 第241集～第248集	2023年４月～2024年３月発行
2. 国立歴史民俗博物館資料図録13『生田コレクション鼓胴』	2024年３月発行
3.『国立歴史民俗博物館年報19』	2023年12月発行
4. 歴史と文化への好奇心をひらく『REKIHAKU』 「推定不能　炭素14研究がとらえた未知の巨大太陽フレアの謎」 「歴史をつなぐ」 「顔・身体をもつ道具たち」	2023年６月・10月， 2024年２月発行
5. 展示図録『陰陽師とは何者か－うらない，まじない，こよみをつくる－』	2023年10月発行
6. 展示図録『歴博色尽くし』	2024年３月発行
7. 人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「横断的・融合的地域文化研究の領域展開：新たな社会の創発を目指して」ブックレット『新たな社会の創発を目指して』vol. 1「横断的・融合的地域文化研究の領域展開－新たな社会の創発を目指して」	2023年10月発行
8. 人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「横断的・融合的地域文化研究の領域展開：新たな社会の創発を目指して」ブックレット『新たな社会の創発を目指して』vol. 2「地域文化と博物館」	2023年12月発行
9. 人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「横断的・融合的地域文化研究の領域展開：新たな社会の創発を目指して」ブックレット『新たな社会の創発を目指して』vol. 3「地方文化與博物館的可能性」	2024年３月発行
10.『第９回全国史料ネット研究交流集会 in 宮崎 報告書』	2024年２月発行

『国立歴史民俗博物館研究報告』は第242集より電子出版に移行しました。
全体を「国立歴史民俗博物館学術情報リポジトリ」にてご覧いただけます。
https://rekihaku.repo.nii.ac.jp/
（第242集以降の印刷版は発行しておりません）

利用案内

■開館・開苑時間

３月～９月　９：30 ～ 17：00（入館は16：30まで）
10月～２月　９：30 ～ 16：30（入館は16：00まで）
＊くらしの植物苑　９：30 ～ 16：30（入苑は16：00まで）

■休館日・休苑日

毎週月曜日（休日にあたる場合は翌日）
年末年始（12月27日～1月4日）
その他メンテナンスのため休館・休苑する場合があります。

■入館・入苑料　＊（　）内は20人以上の団体料金
＊ 入館・入苑料には消費税が含まれています。

	総合展示	企画展示
一般	600円（350円）	その都度別に定めます
大学生	250円（200円）	
高校生以下	無料	無料
		（総合展示もご覧いただけます）

くらしの植物苑

大学生以上　100円（50円）

（障がい者手帳等保持者は，手帳提示により介助者と共に入館料・入苑料無料）

■視聴覚設備

公式音声ガイドアプリ

４ヶ国語（日本語・英語・中国語・韓国語）により，総合展示についての解説を聞くことのできるスマートフォン専用音声ガイドアプリを無料で提供しております（利用に際しては，館内無料Wi-Fiへの接続が必要です）。

メディアルーム

歴博の資料・展示・研究を紹介するさまざまな映像・音声番組やデジタルコンテンツを視聴できます。館のイベントに連動したミニシアターや特設の展示空間としても利用します。

図書室

入館した方々は展示資料に関連した図書約9,900冊をご利用いただけます。

■れきはくホームページ

URL https://www.rekihaku.ac.jp

2024年４月からホームページをリニューアルしました。「博物館」と「研究」の２つのトップページを設けて，デザインを一新し，スマートフォンでも快適に見られるようになりました。また，自動翻訳機能による４カ国語表示にも対応いたしました。

■ハローダイヤル

050－5541－8600

交通案内

■京成電鉄利用の場合

京成上野駅から京成佐倉駅（京成本線経由特急利用の場合約55分）下車，バス約５分または徒歩約15分

■ＪＲ東日本利用の場合

東京駅から総武本線佐倉駅(快速利用の場合約60分)下車，バス約15分

■自動車利用の場合

東関東自動車道　四街道I.C.または佐倉I.C.から約15分，国道296号沿い（無料駐車場完備）

周辺案内図

国立歴史民俗博物館　〒285－8502　千葉県佐倉市城内町117
Tel.043－486－0123㈹／Fax.043－486－4209

令和６（2024）年度版　要覧　令和６（2024）年７月発行

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国立歴史民俗博物館
National Museum of Japanese History